

香川県埋蔵文化財センター

研 究 紀 要 IX

2013. 3

香川県埋蔵文化財センター

目 次

古代集落と官衙一川津一ノ又遺跡の検討から— 長井博志.....	1
根香寺所蔵の理兵衛焼 森下友子.....	23
寺田貞次による小豆島の考古資料調査 一小豆島で保管されてきた調査記録と未公表原稿— 乗松真也.....	29

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

古代集落と官衙—川津一ノ又遺跡の検討から—

長井博志

1. はじめに

川津一ノ又遺跡は古代の集落跡などが検出されている遺跡であり、坂出市川津町（古代の鶴足郡川津郷）に所在する。これまで四国横断自動車道の建設や大東川の河川改修事業に伴い、発掘調査が行われ、報告書⁽¹⁾も刊行されている。

筆者は以前、本遺跡のIV区で検出された9世紀前半の官衙的な建物群について検討し、郡衙より序列が低い補完的な官衙であると考えた⁽²⁾。だが、旧稿ではこの官衙の具体的な性格と機能および一般集落であった本遺跡がどのように変化した背景について言及できなかった。

これらは地域における本遺跡の位置づけと深く関わる問題である。よって、以下では川津一ノ又遺跡で確認された古代集落の様相を検討した上で、川津郷や鶴足郡において本遺跡が果たした役割を論じ、これらの課題を考察する。

2. 古代集落の変遷

本節では川津一ノ又遺跡において検出された古代の一般集落が官衙へ変化した背景を考察する前段として、集落の変遷を検討する。時期区分については集落の中枢部分が発掘調査されたIV区の報告に準じ、他の調査区の報告にも適用した。また、遺構の所属時期についても各報告書の所見に倣った。ただ、一部の遺構の所属時期や性格については私見に基づき変更した。

以下、各調査区で検出された居住遺構を中心として遺構の変遷を述べるが、遺構分布を面的に捉えられるIII・IV区の状況を中心に説明する。

古代①（7世紀前葉）

弥生時代終末期に廃絶していた集落が再び形成される時期である。III区（北）・IV区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡1棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡1棟が分布する。

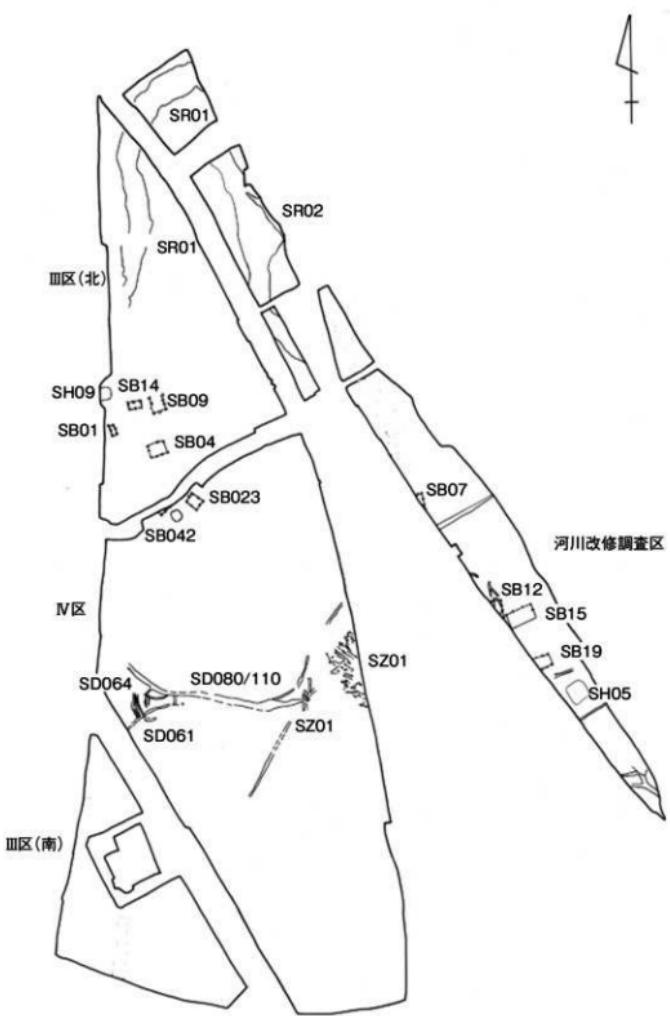
III区（北）・IV区の建物群は2つの建物小群に分かれ、3棟程度の小型建物⁽³⁾で構成される（最大規模のIII区SB04でも20.1m）。倉庫と考えられる竪穴建物跡は含まず、建物配置にも企画性は見られない。

また、IV区中央部には溝状遺構（IV区SD080/110）と烟状遺構（IV区SZ01・SD061・SD064など）が所在する。烟状遺構は一定間隔を空けて並ぶ小溝群であり、平面形状や集落域と区分された配置などからこのように推定されている。

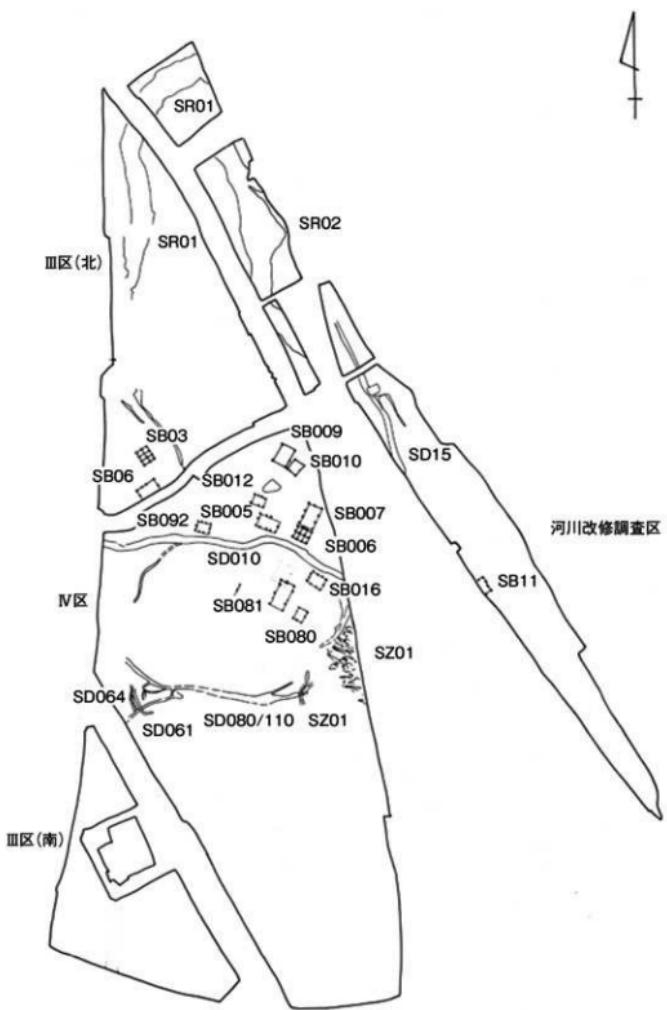
古代②（7世紀中葉）

古代①に継続して、III区（北）・IV区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡12棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡1棟が分布する。

III区（北）・IV区の建物群は新たに掘削された溝状遺構（IV区SD010）の南北に、これと主軸方向を描いて分布し、4つの建物小群に分かれる。各群は中・小型建物3棟で概ね構成され、前代よりやや大型化する。竪穴建物跡は2棟（III区SB03・IV区SB006）あるが、建物配置にも企画性は見られない。



第1図 集落の変遷（古代① 7世紀前葉）（S=1/1500）



第2図 集落の変遷（古代② 7世紀中葉）（S=1/1500）

IV区 SD010は幅・深度より基幹水路であり、改修区調査区 SD15とつながると見られる。これらの水路は短期間で埋め戻され、次期の古代③には存続しない。また、埋戻しに際して多量の完形の土師器、須恵器が解体痕のある牛や馬の骨とともに捨てられていた。

これらの動向は農業インフラという遺構の性格上、川津一ノ又遺跡以外の集落も関与したと見られる点で注意を要する。

古代③（7世紀後葉）

古代②に引き続き、Ⅲ区（北）・IV区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡2棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡3棟が分布する。

建物小群はIV区において不明瞭である。建物群は概ね小型建物で構成されるが、最大規模のIV区 SB138は43.0m²を測る大型建物である。総柱建物跡は2棟（IV区 SB003・SB087）分布する。ただ、これらの配置に企画性は見られない。

また、IV区ではこの時期に「大畦畔」（以下、「堤塘状遺構」と記載⁽⁵⁾）の構築、導水するための木樁の設置、これに接続する基幹水路（IV区 SD040/060）の掘削が行われる。

この堤塘状遺構はIV区以外の調査区でも、やや時期差があるものの検出されている。そしてこれを伴うため池はⅢ区（南）で8世紀代の水田跡に導水されていることから灌漑用水源であり、各調査区で一連のものであれば約3haの規模を有したとされる。また、古代②で掘削されたIV区 SD010・改修区調査区 SD15が短期間で埋め戻されたのは、ため池構築と共に伴う基幹水路の変更が背景にあったと見られる。

なお、水田状遺構（SX01。畦畔は検出されず。）が改修区調査区で形成され、10世紀代まで存続する。

古代④（8世紀前葉）

居住遺構の分布が概ねIV区に限定される時期である。IV区では掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡1棟が、改修区調査区で竪穴住居跡1棟が分布する。

IV区の建物小群は1つで、概ね小型建物で構成される（ただ、最大規模のIV区 SB020は55.5m²を測る大型建物）。総柱建物跡も1棟（IV区 SB106）のみであるが、ある程度企画性を持った配置を探ることが前代までとの大きな相違点である。具体的には東側に位置するSB017・SB019・SB028の3棟が南梁間の、SB019・SB020が東西桁行の柱筋を揃える。また西側に位置するSB035・SB106も東桁行の柱筋を揃える。

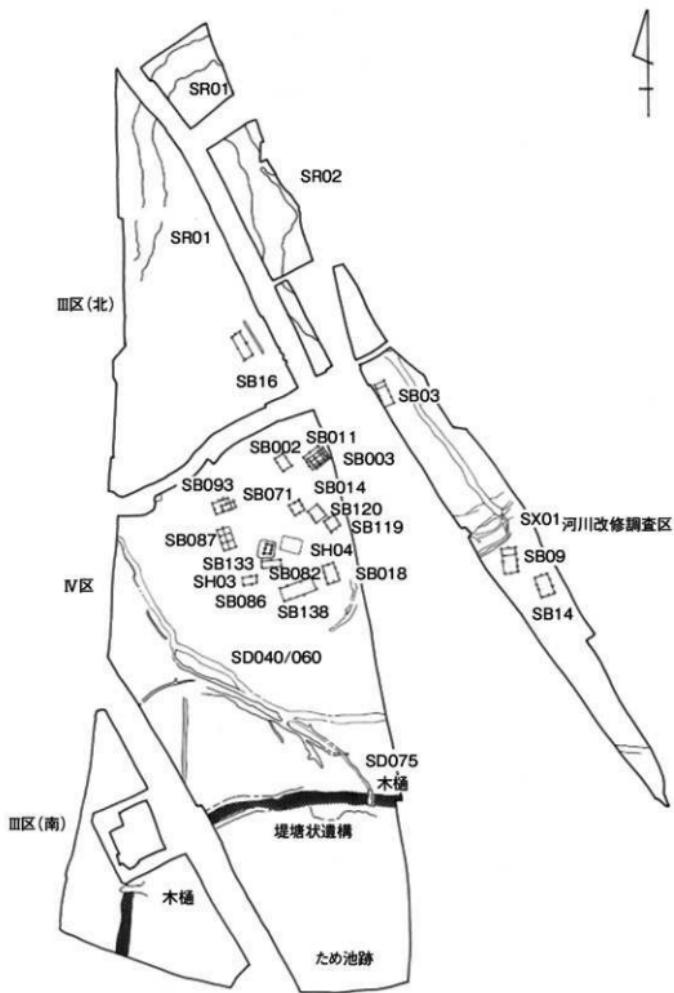
また、IV区ではため池に接続する基幹水路（IV区 SD040/060など）がこの時期に埋没する。一方、Ⅲ区は先述のⅢ区（南）の他、Ⅲ区（北）も川跡（SR01・SR02）が埋没し、大部分が水田化される。

古代⑤（8世紀中葉）

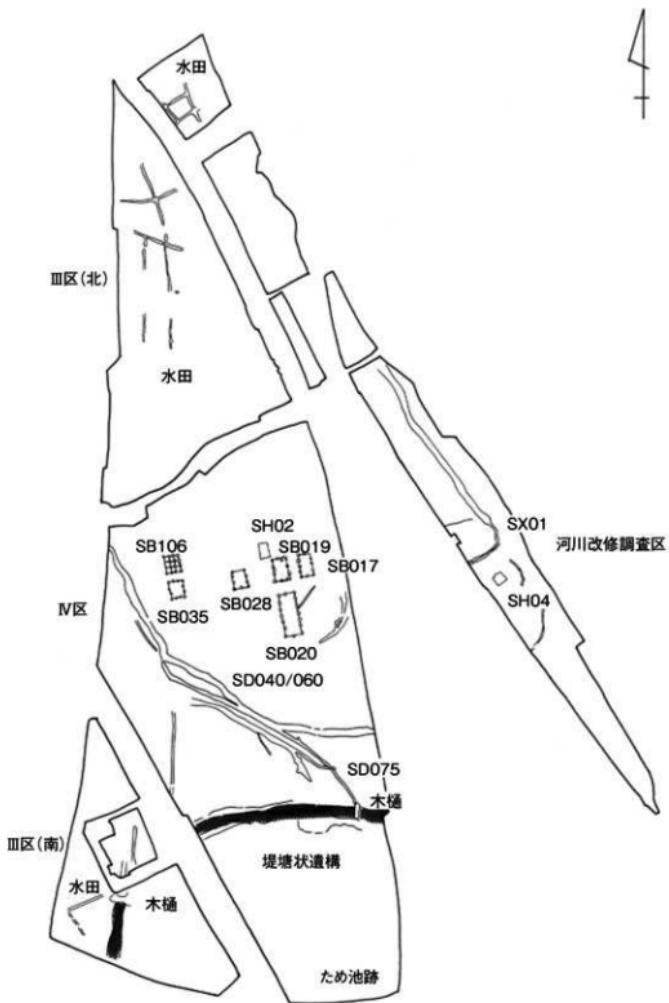
居住遺構の分布がIV区に限定され、以後古代⑥（9世紀後半～10世紀前半）まで他の調査区では見られない。

IV区の建物小群は1つで、小型建物10棟からなる。建物の重複を考慮すると最大8棟が同時併存し、うち3棟が総柱建物跡である。また、ある程度企画性を持った配置を探る。具体的にはSB026・SB030が南桁行の、SB030・SB031が東側の柱筋を揃える。また、SB034・SB038は東西桁行の柱筋を揃えて直列する。

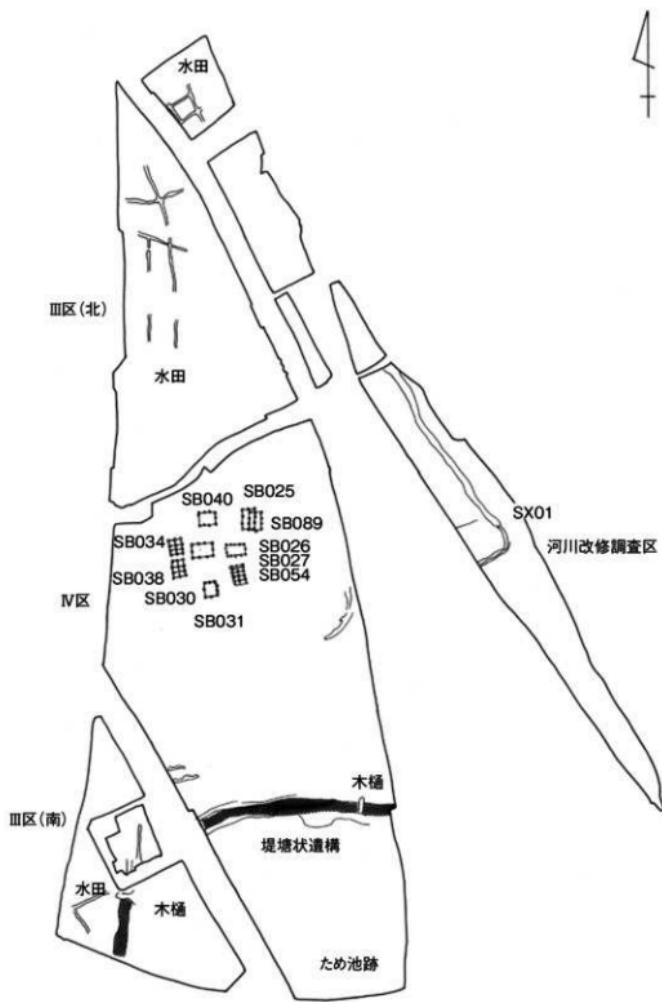
このように前代と比べて、建物小群における倉庫数が増加し、企画的な配置も継続される。



第3図 集落の変遷（古代③ 7世紀後葉）（S=1/1500）



第4図 集落の変遷（古代④ 8世紀前葉）（S=1/1500）



第5図 集落の変遷（古代⑤ 8世紀中葉）(S=1/1500)

古代⑥（8世紀後葉）

IV区の掘立柱建物跡は9棟が分布し、2つの建物小群を構成する。どちらも中型建物を各1棟含む。北側の建物小群は4棟で構成され、ある程度企画性を持った配置を探る。具体的にはSB032・SB033が東桁行の、SB032・SB055が梁間の柱筋を揃える。また、このうち2棟が総柱建物跡である。

このように北側の建物小群は企画的な配置を採り、複数の倉庫を持つという前代の特徴を継続し、中心的な建物がやや大型化する。

古代⑦（9世紀前半）

IV区で18棟の掘立柱建物跡が分布し、西側で官衙が形成される。詳細は後述するが、同時併存しうる建物群は最大9棟である。その特徴は

- ① 全体的な建物配置が「ロ」字状を呈し、左右対称を意識している。
- ② 建物群は「コ」字形に並ぶ大型建物群と直列配置される倉庫群などにより構成される。
- ③ 区画施設は伴わない。

これらの諸点は前代までの建物群と比較して、配置・規模・倉庫数などにおいて整備・拡大されたものと評価できる。

なお、SB072・SB079・SB101は「L」字状に並び、相互に柱筋を揃えるため、同時併存したと考えられる。また、この建物群は官衙構成建物と重複・近接するため、やや時期差があると見られる。

他の調査区でこの時期に属する主要な遺構として、ため池に伴う堤塘状遺構と改修区調査区の水田状遺構（SX01）がある。

古代⑧（9世紀後半～10世紀前半）

IV区の掘立柱建物跡は43棟を数え、III区（北）でも3棟が分布する。このように多数が分布するのは前代までの年代設定よりも長い約100年間の時期幅を持つことによる。この建物群は報告書で指摘されているとおり、主軸方向と重複状況から少なくとも3期に細分できると考えられる。ただ、IV区中央に密集する建物群は主軸方向が類似し、詳細な時期決定が可能な出土遺物も乏しいため、同時期建物群を抽出するのは困難である。このため一括して提示した。

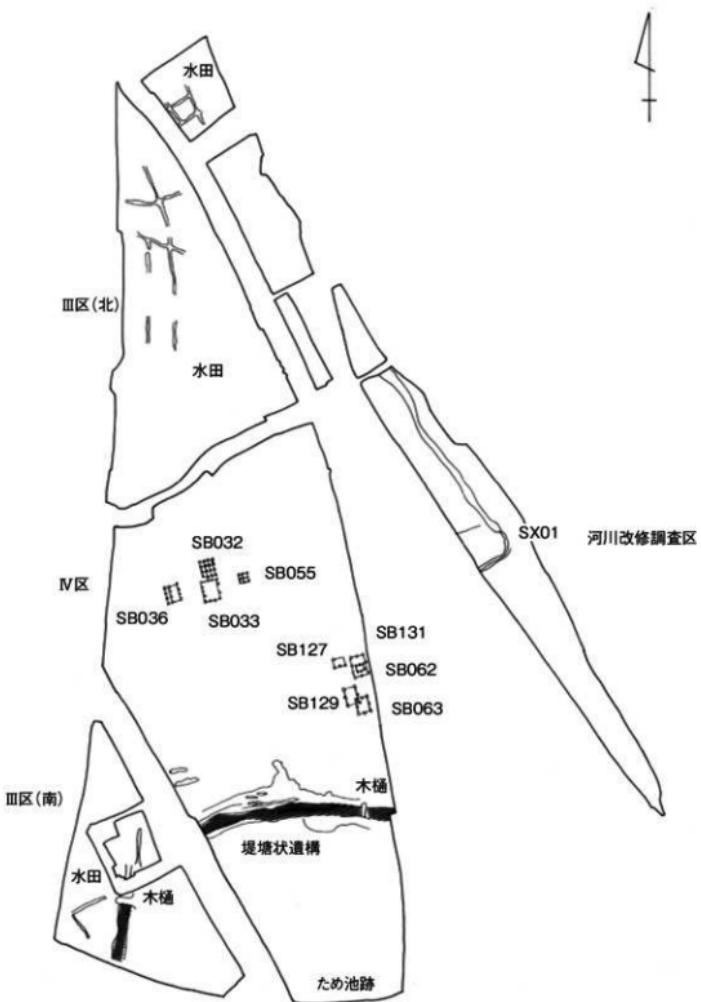
この密集建物群は重複を考慮すると、同時併存したのは15棟程度であると考えられる。これらには前代のような官衙的配置は見られないが、注目されるのは直列配置された3棟の建物跡（SB064・SB065・SB068）である。この3棟は建物の中心軸を一致させる。また、2棟の総柱建物跡（SB064・SB065）は桁行の3列の柱筋を揃える。このように企画性を持った建物配置も一部で認められる。

以上の集落変遷を整理すると、次の4段階に区分できる。

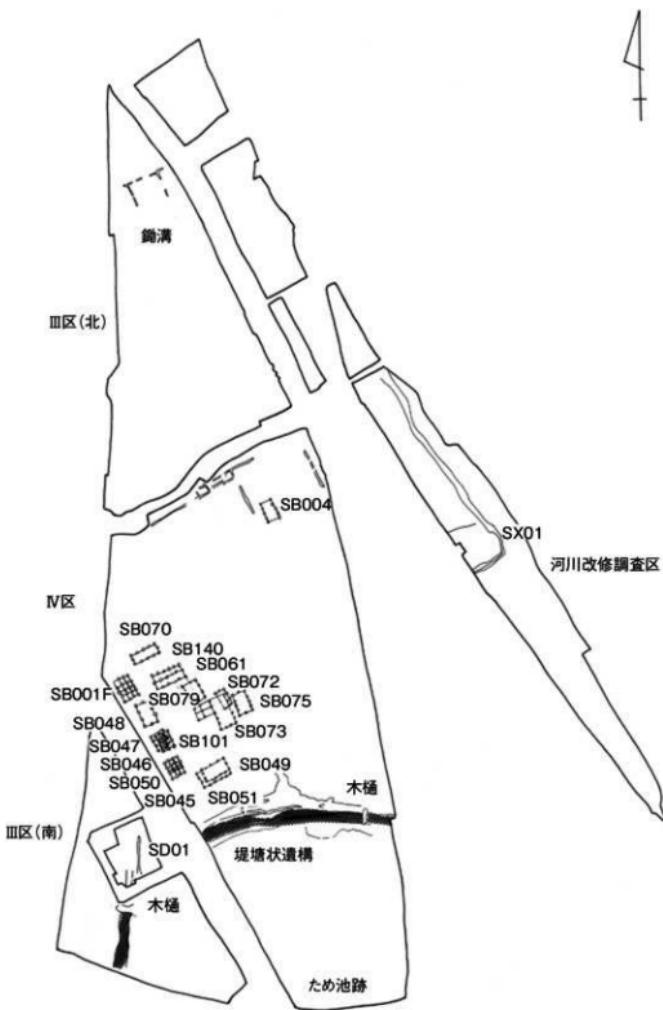
I期（①～③期 7世紀代）一般集落期

建物数と中心的な建物の規模が時期を追って増加・拡大する。ただ、建物小群に伴う倉庫は最大1棟と限定的であり、企画性をもつ建物配置は見られない。

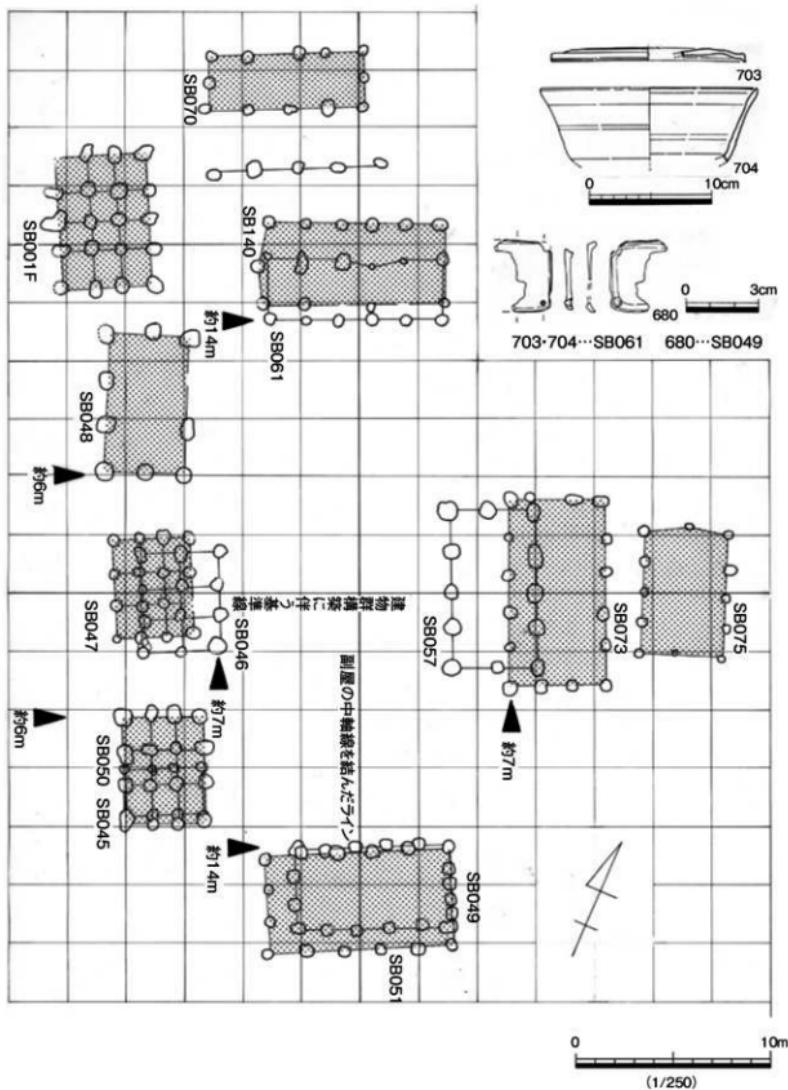
農業生産関連遺構では水田や畑が集落付近に形成される。また、ため池構築やこれに伴う基幹水路の改修が行われる。なお、旧水路の埋戻しに際しては牛や馬の骨が投棄されているが、これらは耕作に利用されたと考えられる。



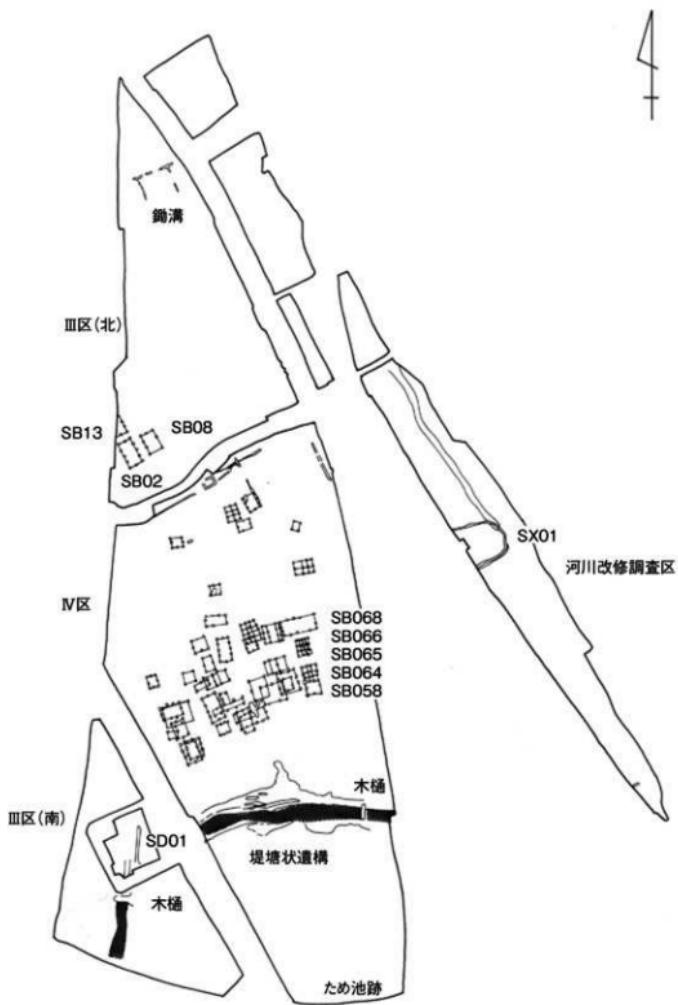
第6図 集落の変遷（古代⑥ 8世紀後葉）（S=1/1500）



第7図 集落の変遷（古代⑦ 9世紀前半）(S=1/1500)



第8図 川津一ノ又遺跡の宮衙 (S=1/250 10尺メッシュ)



第9図 集落の変遷（古代⑧ 9世紀後半～10世紀前半）（S=1/1500）

II期（④～⑥期 8世紀代）官衙関連集落期

建物数は10棟以下に減少し、中心的な建物もさほど大きくない。ただ、建物小群に伴う倉庫数が複数となり、比重が高まる。また、直列配置されたり、柱筋を描えたりする企画的な建物配置が継続して見られ、やや官衙的な様相がうかがえる。このため公的な物資の集積・管理が行われた可能性がある。

農業生産関連遺構はため池に接続する基幹水路（IV区 SD040/060など）が埋没する一方、水田域が拡大する。

なお、土馬の足先1点が出土している（⑤期のIV区 SB030）。

III期（⑦期 9世紀前半）官衙期

最大9棟の建物が左右対称を意識した「ロ」字状に配置される。「コ」字形に並ぶ中心建物群には大型建物を含み、倉庫群は直列配置される。またII期に続き、倉庫の占める割合が高い。このように倉庫を含む建物群がII期よりも整備・拡大され、官衙的な様相が色濃い。遺物の点でも中心建物であるIV区SB049で銅製帶金具が1点出土している。また、時期不詳ながらIII区では石帯1点、墨書き土器2点が出土している。

農業生産関連遺構ではため池に伴う堤塘状遺構と水田状遺構（改修区調査区 SX01）などが存続する。

IV期（⑧期 9世紀後半～10世紀前半）官衙関連集落期

同時併存した建物は最大15棟程度であるが、III期ほど整然とした配置は採らない。ただ、一部の倉庫を含む建物群は直列に配置され、ある程度の企画性が見られる。このためIII期に継続して公的な物資の集積・管理を担ったかもしれない（III区では当該期に属する灰釉陶器片が10点出土しており、物質流通の一端がうかがえる。）

農業生産関連遺構ではため池に伴う堤塘状遺構と水田状遺構（改修区調査区 SX01）などが存続する。

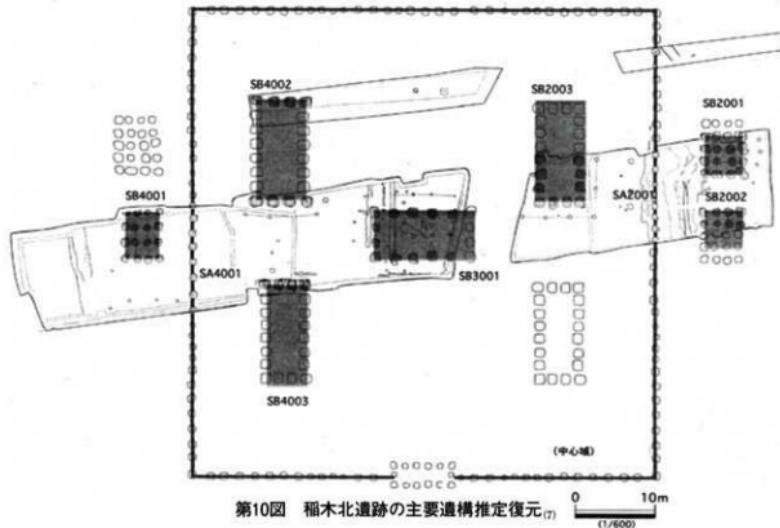
このように7世紀代の集落の形成・発展と合わせて、周辺の耕地開発や農業インフラの形成・再編成などが行われる。その後、8世紀代に集落は官衙的な様相を帯び、水田域も拡大する。そして、9世紀前半には官衙が出現する。ただ、この官衙は短期間で機能を終え、9世紀後半には再び集落に変質する。そして、10世紀代には集落も廃絶する。

3. 9世紀前半の官衙

本節では川津一ノ又遺跡で検出された9世紀前半の官衙について、他の官衙的な遺跡事例と比較し、その性格と機能を検討する。

まず、この官衙について述べると、「コ」字形に配置された大型建物群（中心施設）に直列に並ぶ倉庫群が伴い、全体的な配置形状は「ロ」字状を呈する。これらは区画施設を伴わないものの、左右対称を意識して配置される。こうした中心建物群の配置形状と左右対称性は官衙政府でしばしば見られるため、官衙的な建物群と評価できる。

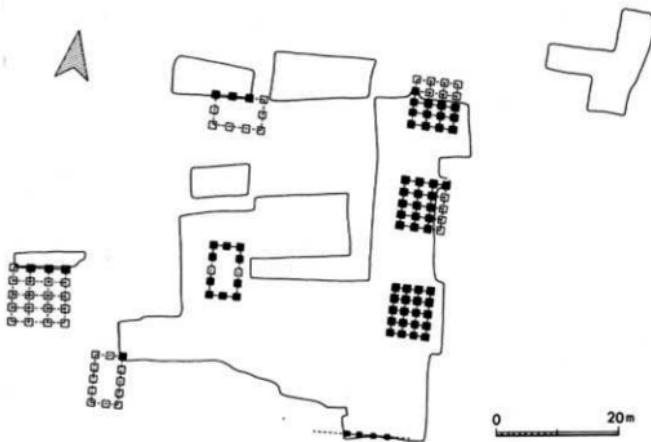
旧稿では他の官衙的な遺跡事例として、稻木北遺跡⁽⁷⁾（郡衙クラスの郡衙出先機関）、下川津遺跡（豪族居宅）⁽⁸⁾などと比較した。概要を述べると、この建物群は稻木北遺跡の建物群ほど建物配置や主軸方向に厳格な企画性が見られず、区画施設も伴わない。また、中心建物群の規模も小さい。一方で中心建物群が左右対称に並ぶ「コ」字形配置を探るという特性は下川津遺跡の建物群では見られないため、郡衙より序列が低い補完的な官衙であると考えた。こうした経緯から、本節では未検討の事例（正倉別院



第10図 稲木北遺跡の主要造構推定復元(7)



第11図 下川津遺跡 大型建物群4 遺構配置図₍₄₎₍₅₎ (S=1/600)



第12図 島根県田原遺跡 A期（8世紀代）の建物群₍₉₎ (S=1/800)



第13図 鳥取県戸島遺跡（7世紀後半～8世紀初頭）の建物群₍₁₀₎ (S=1/600)

と郡衙出先機関兼郷衙）と比較する。

島根県田原遺跡⁽⁹⁾

意宇郡衙に付随する正倉別院とされる遺跡である。8世紀代には直列する正倉と推定できる倉庫群と側柱建物跡1棟が設置された。倉庫群のうち、2棟は40m以上を測り、川津一ノ又遺跡のそれよりかなり大型である。一方、中央に位置する側柱建物跡は倉庫群の管理棟と見られるが、その規模は川津一ノ又遺跡の中心建物群よりも小さい。また、前庭をもつ建物配置でない。このように倉庫主体の建物構成を探る点で川津一ノ又遺跡とは異なる。

鳥取県戸島遺跡⁽¹⁰⁾

気多郡衙とされる上原遺跡の東方約3.5kmに位置し、7世紀後半～8世紀初頭に存続する。隣接・後に出する馬場遺跡と共に郡衙出先機関兼郷衙と評価される遺跡である。南北の二郭からなる複郭を設け、南郭では大型建物群が左右対称の「ロ」字形に配置される。また、建物間を塀で連結し、区画施設とする。

川津一ノ又遺跡の建物群とは実務的な機能差を反映するであろう相違点がある（複郭 建物ごとの平面形・規模が画一的 倉庫群や從属棟を伴わない 前庭が広い 区画施設を伴う、など）ものの、類似点も多い（ア. 中心建物群が左右対称の官衙の配置を探る イ. 建物位置を踏襲して建て替えされる ウ. 建物群の分布範囲や中心建物の規模が郡衙のそれよりも小さい エ. 一般的な郡衙よりも存続期間が短い、など）。

このうち、ア・イには官衙的な「ロ」字形の左右対称配置への執着がうかがえ、官衙遺跡であると考えられる。また、ウ・エから郡衙よりも下位に属すると見られる。

上記のとおり、前稿と合わせて様々な性格の官衙的な遺跡との対比を行った。その結果、郡衙出先機関兼郷衙とされる戸島遺跡と類似点が多い。ただ、他の郡衙出先機関とされる遺跡でもこれほど整備度が高い事例は乏しいし、郷衙は検出遺跡ごとの多様な様相が指摘され⁽¹¹⁾、実態が不明瞭な部分も大きい。

このため本節での検討をもって、川津一ノ又遺跡の9世紀前半の官衙を郡衙出先機関兼郷衙と結論付けることはできないが、本施設の性格を考える上で手がかりとなる。

4. 9世紀前半の官衙と古代の鶴足郡

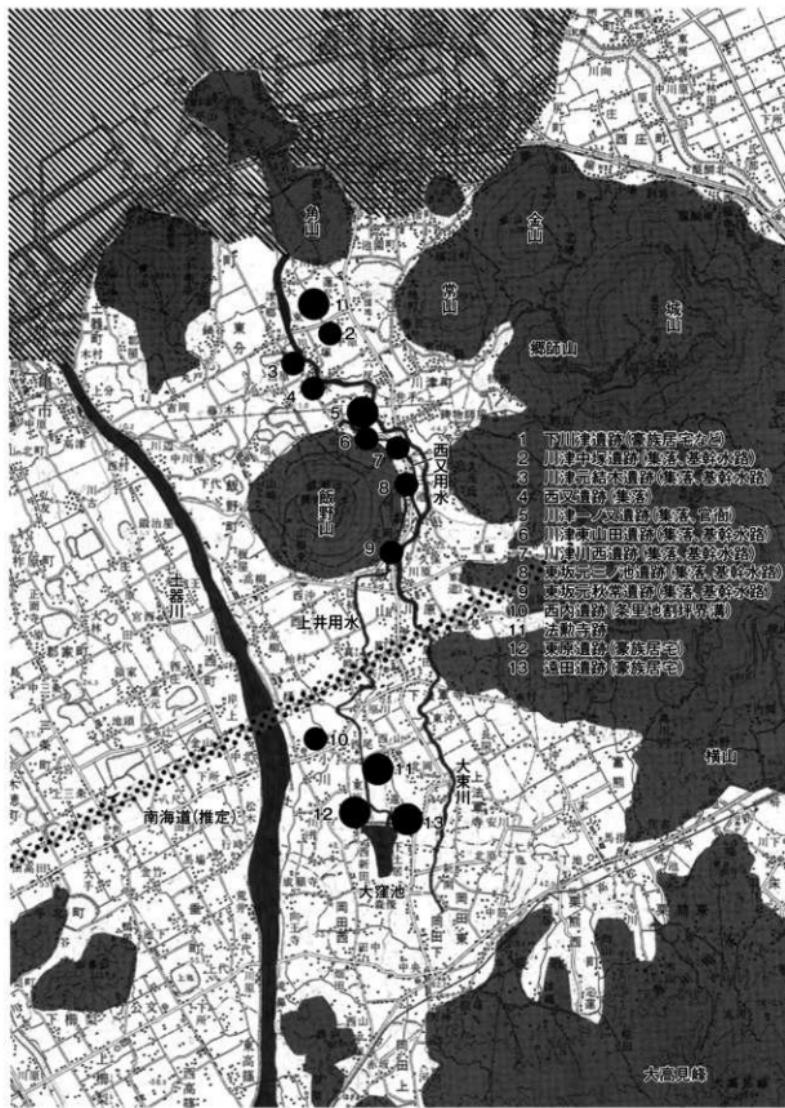
本節ではまず、古代の鶴足郡と川津郷の様相を検討し、川津一ノ又遺跡を取り巻く周辺環境を確認する。次いで、郡内での本遺跡の変遷をたどり、9世紀前半の官衙の具体的な性格や機能を考察する。

（1）鶴足郡の古代の様相

（i）地理的環境

古代の鶴足郡は西側で那珂郡、東側で阿野郡と接する。その郡域は東側と南側を丘陵群や山塊に囲まれ、北側は瀬戸内海に面する。残る西側も土器川が概ね郡境に相当する（厳密には土器川の西側まで広がると考えられる）。このように郡域は自然地形により概ね区画される。

次いで郡内の地形を巨視的に見ると、北部に低地（平野・低位段丘）が広がり、南部に丘陵や山塊が密集する。この北部の低地は概ね大東川の流域に相当し、飯野山を境にさらに南北に区分される。この



第14図 川津一ノ又遺跡の周辺環境 (S=1/60,000)

ためこれらの南北2つの低地もそれぞれ四周を自然地形に囲まれている。

詳細は後述するが、郡内の低地が南北に区分され、完結的な地形であることは豪族の分布や川津一ノ又遺跡の郡内での位置づけと深く関わると考える。よって、以下では川津一ノ又遺跡が所在する飯野山北部を「川津地区」、飯野山南部を「飯山地区」と呼称し、対比させて説明する。

(ii) 交通

【川津地区】

川津地区を経由する東西ルートは郡域東端の丘陵群により画されて限定的であり、2ルートが想定されている⁽¹²⁾。

- ① 常山・金山と郷師山・城山間の山道を抜けるルート
 - ② ①ルートの途中から郷師山の南麓に沿って東へ回り、推定南海道に至るルート
- どちらのルートを探っても、川津一ノ又遺跡付近を通過することとなる。

また、水上交通については、古代の郡域の北端部に海岸線が深く湾入していたと推定されること、「角山」(津の山)、「津の郷」などの地名から、先述の下川津遺跡(豪族居宅など)付近に津の存在が示唆されている⁽¹³⁾。

【飯山地区】

飯山地区を経由する東西ルートもやはり東端の丘陵群により限定的であるが、官道である南海道が敷設されたと推定されている⁽¹⁴⁾。他には横山と大高見峰から北へ延びる丘陵群の間を経由するルートが想定できる。

また、川津・飯山の2地区を結ぶ南北ルートは地形的に飯野山の東麓、西麓を経由する2ルートが想定できるが、川津一ノ又遺跡は東麓ルートに近接する。

このように川津一ノ又遺跡は川津地区の東西ルートと郡内の南北ルートが交わる交通の要衝にあり、津とも近接する。

(iii) 主要な古代遺跡

【豪族関連遺跡】

川津一ノ又遺跡を鶴足郡内の官衙と捉える場合に注目されるのが、地域の支配者層である豪族に関連する遺跡である。

【川津地区】

豪族居宅や公的施設とされる遺跡として、先述の下川津遺跡がある。6世紀後半～12世紀代と長期に渡り存続し、7世紀中葉～8世紀代にかけては企画的な配置を探る大型建物群が見られる。また、先述した立地等を活かし、在地の物資流通や農業・手工業生産の拠点であったとされる。

本遺跡は川津一ノ又遺跡よりも先行して形成され、津を掌握した川津地区の中心的な存在であるため、両者は有機的な関係にあったと推定できる。

【飯山地区】

法勧寺は郡内で確認されている唯一の白鳳期寺院で、中世まで存続した。その創建時期から地域の有力豪族が関与したと見られる。また、豪族居宅とされる遺跡として、7世紀中葉～8世紀代の東原遺跡・遠田遺跡⁽¹⁵⁾がある。これらは谷地形を挟んで隣接し、大型建物が各1棟検出された。法勧寺跡とは地理的に近接し、創建時期が遺跡の出現期と同時期であるため、同寺の創建豪族ないし彼らと密接に関わる有力豪族が居住したとされる。

【古代集落】

川津地区で多くの発掘調査が行われており、古代に属する集落も多数確認されている。ただ、これらはいずれも短期間で廃絶する小規模な一般集落であり、官衙的な建物配置は見られない。

こうした状況を川津一ノ又遺跡のそれと対比すると、本遺跡が下川津遺跡に次ぐ川津地区的拠点であったことがうかがえる。

【農業関係インフラ】

【川津地区】

川津一ノ又遺跡で7世紀後葉までにため池とこれに接続する基幹水路が構築される。また、川津東山田遺跡・川津中塚遺跡・川津元結木遺跡などで9世紀ごろまでに大型の基幹水路が掘削される。

【飯山地区】

上記の東原遺跡・遠田遺跡に挟まれて所在する大窪池については次のような指摘がある⁽¹⁶⁾。

- ① 郡司層主導の大規模開発が7世紀中葉～8世紀代に周辺地域で進められる中で築かれた。
- ② その灌漑先は川津地区である。
- ③ このため飯野山東麓を経由し、南北へ延びる基幹水路網が整備された。

これが妥当であれば、飯山地区が川津地区的水利の一端を担ったと言え、鶴足郡内における2地区的関係を考える上で重要である。

また、条里地割に伴う坪界溝はどちらの地区でも9世紀代に掘削され⁽¹⁷⁾、この点での土地開発にさほど時期差はない。

以上の鶴足郡の様相を見ると、飯山地区は白鳳期に法勅寺が建立され、その創建豪族（や彼らと密接な関係にある有力豪族）が本拠地としていたと考えられる。また、南海道が敷設されたと推定される。さらに大窪池は8世紀代には構築され、川津地区も灌漑したとの指摘がある。このように古代の鶴足郡においては飯山地区が中核的な位置を占めていたと見られる⁽¹⁸⁾。

ただ、川津地区でも下川津遺跡で長期に渡り豪族の居宅などが営まれた。彼らは津を掌握し、独自の地位を占めていたと考えられる。そして、川津一ノ又遺跡はこれらの2地区の中央付近に位置する。この立地は2地区的関係において、川津一ノ又遺跡の機能にも影響したと考えられる。

（2）川津一ノ又遺跡と9世紀前半の官衙

鶴足郡の上記の様相を踏まえて、川津一ノ又遺跡の7～8世紀代の状況、また9世紀前半に形成された官衙の性格と機能を述べる。

7世紀代の一般集落期に本遺跡は、川津地区の中核的な遺跡である下川津遺跡との関わりが深かったと見られる。下川津遺跡では7世紀中葉に豪族居宅が出現し、継続する。このため7世紀後葉に築かれ、川津地区を灌漑したと想定される本遺跡のため池築造やこれに接続する基幹水路の改築には、下川津遺跡に居住した豪族が関与したと考えられる。

その後、8世紀代の官衙関連集落期に本遺跡の建物群は企画的な配置を取り、倉庫数が増加する。また、下川津遺跡でも公的施設とされる大型倉庫群（大型建物群6）⁽¹⁹⁾が8世紀中葉に出現する。このように2遺跡ではともに物資の集積活動が活発化する。また、建物群の性格に官衙的な要素がうかがえる。このことは両者の依然として強い結びつきを示すとともに、川津一ノ又遺跡の倉庫数の増加が本遺跡に



第15図 下川津遺跡 大型建物群6 遺構配置図⁽⁴⁾⁽⁸⁾ (S=1/500)

関わる物資収納だけを意図したものでないことを示唆する。なお、こうした動向には一般的に7世紀末～8世紀初頭とされる郡衙の成立⁽²⁰⁾も関係していると推測される。

そして、9世紀前半になると、本遺跡では郡衙より下位レベルの官衙が形成され、一大画期を迎える。

これに伴う倉庫群は4棟が直列配置され、前代より棟数・規模が拡大する。一方、下川津遺跡では8世紀後葉から9世紀中葉にかけて遺跡が断絶する。このように前代まで川津地区の中心的位置を占め、大型倉庫群が設置されていた遺跡が途絶える時期に、同様に倉庫群を重視した官衙が出現する状況は類似施設の（一部）移転を示すと考える。

また、この移転に際して、下川津遺跡で従来見られなかった官衙（特に左右対称の「コ」字形配置を探る中心建物群）が設置される。こうした状況は単に川津地区内だけでの動向とは考えがたく、鶴足郡衙の意向を反映したと考える。このように捉えると、本遺跡の官衙の性格は鶴足郡衙が設けた出先機関であろう。そして、設置の背景は次のように推測する。

下川津遺跡は川津地区の完結的な地勢の下、津を利用した交易や各種の生産などにおいて郡内で独自の地位を占める伝統的な豪族の居住地であった。だが、本遺跡は8世紀後葉に断絶し、その勢力も衰退した。この機会に鶴足郡衙は川津地区への影響力を強め、郡内支配を円滑化することなどを目的として、出先機関を新たに設けた。

次いで、建物配置から見たこの官衙の機能を述べる。建物群の全体形状は「口」字状を呈するが、「コ」

字形配置の中心建物群と直列する倉庫群からなる。建物群に囲まれた前庭は狭いため、「コ」字形配置が示す政庁的な機能を備えるものの、儀式はさほど重視されていないと見られる。むしろ整備された倉庫群や付近の従属棟の存在から物資の集積・管理などが主要な機能であると考える。

なお、その後9世紀後半～10世紀代には下川津遺跡で再び大型建物群が見られる。一方、川津一ノ又遺跡では官衙が廃絶し、一定の企画性をもつ建物群が少数のみ展開するのにとどまる。このため川津地区の拠点機能は再度、下川津遺跡に戻ったと考えられる。

5.まとめ

本稿では川津一ノ又遺跡で確認された古代集落とそこに出現した9世紀前半の官衙が川津郷や鵜足郡において果たした役割を論じ、①この官衙の性格と機能、②一般集落から官衙への変化の背景を検討した。

その結果、

- ① 官衙の性格は鵜足郡衙の出先機関であり、川津地区において主に物資の集積・管理などの業務を担った。また、伝統的な勢力を維持する豪族が居住する川津地区への牽制的な意味もあった。
- ② 一般集落から官衙へ変化した背景としては、8世紀代に鵜足郡衙の下で下川津遺跡が担っていた物資の集積・管理などを川津一ノ又遺跡は補佐していたが、下川津遺跡が断絶したため、9世紀前半には本遺跡がこの業務を担った、と考えた。

川津一ノ又遺跡に突如、形成された官衙を集落の変遷や地域論的な観点から分析したが、推測を重ねた部分も多い。今後の発掘調査や研究の進展を踏まえて、更に検討を加えていきたい。

- (1) Ⅲ区 山下平重「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ」香川県教育委員会(1997)
- Ⅳ区 古野徳久「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ」香川県教育委員会(1998)
河川改修調査区 片桐孝浩「中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡」香川県教育委員会(1997)
- (2) 長井博志「川津一ノ又遺跡の官衙的建物群について」「香川県埋蔵文化財センター研究紀要V」香川県埋蔵文化財センター(2009)
- (3) 県内では、床面積が40m²を超える古代の掘立柱建物は「大型」と評価できる(4)とされる。このため本稿では、床面積が40m²以上:
30m²以上～40m²未満:中型建物
30m²未満: 小型建物、と記載する
- (4) 佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」「律令国家における地方官衙造構研究の現状と課題－南海道を中心にして」古代学協会四国支部(1998)
- (5) 本造構は「堤壙状造構」と呼称すべきであり、性格はため池の土手であるとする註(6)文献の指摘に従って、このように記載する。
- (6) 木下晴一「坂出市川津町の古代のため池跡」「香川県埋蔵文化財センター研究紀要V」香川県埋蔵文化財センター(2009)
- (7) 長井博志「福木北遺跡」「一般国道11号(坂出丸亀バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 福木北遺跡 永井北遺跡 小塚遺跡」香川県教育委員会(2008)

- 長井博志「植木北遺跡と古代の多度郡」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター（2008）
- (8) 西村尋文他「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡」香川県教育委員会（1990）
- (9) 三宅博士他「史跡 出雲因山代郷正倉跡」鳥根県教育委員会（1981）
- (10) 吉村善雄「上光道路群発掘調査報告書－因幡国喜多郡推定坂本郷所在の官衙遺跡－」鳥取県気高郡気高町教育委員会（1988）
　　中山敏史「第一章第六節 郡衙の出先機関－戸島遺跡・馬場遺跡の性格をめぐって－」『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房（1994）
- (11) 井上尚明「郷家に関する一試論」『埼玉県考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（1991）
- (12) 大久保徹也「立地と環境」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ 下川津遺跡」香川県教育委員会（1990）
- (13) 佐藤竜馬「讃岐・川津地区遺跡群の動向」「古代文化52」財団法人古代学協会（2000）
- (14) 金田章裕「条里と村落生活」『香川県史1』香川県（1986）
- (15) 塩崎誠司「團体營は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 遠田遺跡 東原遺跡 上川井遺跡 前谷古墳 西内遺跡」飯山町教育委員会（2000）
　　2遺跡はどちらもごく小規模な発掘調査しか実施されていないため、建物配置などは不明である。だが、どちらも大型建物（特に遠田遺跡では3間×7間以上【床面積48m²以上】の建物）が検出された。
- (16) 藏本晋司「第V章まとめ 第2節 古代幹線水路について」『国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東坂元秋常遺跡Ⅰ』香川県教育委員会（2008）
　　なお、この際に整備された大堀池から川津地区に至る灌漑水路は現在の上井用水・西又用水に機能が継続されることが指摘されている。
- (17) 川津地区では川津一ノ又遺跡・下川津遺跡で、飯山地区では西内遺跡で9世紀代に条里坪界溝が掘削される。
- (18) 9世紀代には飯山地区的東原遺跡・遠田遺跡で豪族居宅が廃絶する。ただ、「(1) 竹足郡の古代の様相」で述べた諸要素より、本地区が竹足郡の中核を担う状況は変化していないと考える。
- (19) 「大型建物群○」という呼称は下記文献による。
　　佐藤竜馬「讃岐における官衙開闢遺跡と集落動向」「律令国家における地方官衙構造研究の現状と課題－南海道を中心に－」古代学協会四国支部（1998）
- (20) 山中敏史「第3章第3節 国衙・郡衙の成立と変遷」「古代地方官衙遺跡の研究」 塙書房（1994）

根香寺所蔵の理兵衛焼

森下友子

1. はじめに

理兵衛焼は高松藩のお庭焼で、御用焼物師の紀太理兵衛が焼いた焼物である。高松焼、御林焼などとも呼ばれていたが、近年では理兵衛が焼いたことから、理兵衛焼と呼ぶようになった。

根香寺は香川県高松市中山町に所在し、高松市と坂出市にまたがる溶岩台地の五色台の青峰山に位置する。天台宗寺院で、四国八十八ヶ所靈場82番札所でもある。開基の年代については貞觀年間（859～877）、天長9年（832）と諸説あるが、「根香寺」の寺院名を確認できる資料から少なくとも鎌倉時代末頃には寺院として成立していたことがわかる。室町時代には衰退したが、生駒藩2代藩主生駒一正や高松藩初代藩主松平頼重によって再興された。特に、松平頼重は真言宗であった根香寺を天台宗に帰宗させ、再興に力を注いだ。また、享保3年（1718）に大火災により堂宇等を失うが、宝暦年間（1751～1763）には5代藩主松平頼惣による大規模な再建が行なわれた⁽¹⁾。このように、根香寺は松平家と係わりが深く、第1表のように松平家からの下賜品と思われる葵文の付く陶器を始め、いくつかの理兵衛焼を所蔵している。ここで紹介するのは根香寺の所蔵する理兵衛焼で、色絵陶器皿と、箱書きのある色絵陶器蓋付碗である。

2. 理兵衛焼

紀太家に残された由緒書をみると、紀太家は代々焼物師を勤めていた家柄であることがわかる⁽²⁾。紀太家の焼物の元祖は森鷗半弥重芳である。重芳は信楽の陶工で、唐人の雲林院何某から製陶を習った。2代目の森鷗半作兵衛重利は信楽から京都粟田口へ出て陶業を行っていたところ、正保4年（1647）高松藩初代藩主松平頼重に御用焼物師として登用された。2年後の慶安2年（1649）に京都から高松に転居し、屋敷と紀太理兵衛の名を与えられた。その後、紀太家では代々理兵衛を襲名し、高松藩の御用焼物師を勤めた。明治時代に入り、禄を失ったが、名を理平と改めて引き続き陶業に従事した。現在は14代目が活躍中である⁽³⁾。

理兵衛焼は透明釉の上に青・赤・金などの上絵を施す色絵の陶器で、京焼と作風が似通っており、高松仁清とも呼ばれている⁽⁴⁾。作兵衛重利は京都粟田口から高松に移り住み、藩の焼物師を務めるが、栗

第1表 根香寺所蔵の理兵衛焼一覧

番号	器種	法量	印鑑・袖など	備考
1	蓋付碗	口径11.1cm、高7.7cm、底径4.5cm	印鉛無し。箱底に「…享保五子五月吉日 茶碗箱…」の墨書き。	5個体あり。
		口径10cm、高2.7cm	印鉛無し。箱底に「…享保五子五月吉日 茶碗箱…」の墨書き。	11個体あり（うち1個体は破片）。
2	皿	口径15cm、高2.7cm	型打ち成形。印鉛無し。全個体煤（？）付着。	8個体あり。
3	香炉	口径18.5cm、最大径22cm、高15.5cm	灰釉。破風「高」。葵文貼り付け	
4	台付蓋	口径27.5cm、高38cm、底径21cm	灰釉。印鉛無し。葵文貼り付け	
5	燭台	底径21.5cm、高さ46cm前後	灰釉。破風「高」。葵文貼り付け	

田口での陶法が高松でも受け継がれたことが予想される。江戸時代の理兵衛焼の作品は松平家とゆかりの深い寺社を中心に多数残されているが、製作時期や製作者が明らかになっているものは数少ない。製作時期が明確な作品は嘉永年間（1848～1854）の年次が記された暦文茶碗2点（個人所蔵）と、天和2年（1682）の年次が記された色絵香炉（さぬき市極楽寺所蔵）の合計3点だけである⁽⁵⁾。また、理兵衛焼には鍋蓋の「高」と破風「高」の印をもつもの、無印のものがあることが知られている。この印は製作年代を知る手がかりとなっており、無印のものは2代目重利の作、鍋蓋「高」は3代目重治、破風「高」は3代目重治以降の作であると伝えられてきた⁽⁶⁾。しかし、近年江戸高松藩上屋敷や高松城跡を始めとする近世遺跡の発掘調査が行なわれ、遺跡からの出土状況を検討した結果、鍋蓋「高」と破風「高」の印はいずれも18世紀中葉以降に使用されたことがわかつてきたり⁽⁷⁾。

このように理兵衛焼では製作者や製作時期のわかるものは少なく、詳細な技法の変遷などは明らかにならない。以下で紹介する色絵陶器は華やかな絵付けが施されており、この中でも蓋付碗は年次のある箱書があり、製作年代を推定する手がかりのある貴重な資料である。

① 色絵蓋付碗

色絵蓋付碗は直方体の木箱に納められている。木箱の大きさは外寸で26.7cm×26.5cm、高さ23.2cm、側板の厚みは0.9cm、内寸は24.9cm×24.7cmを測る。木箱の中は十字の仕切り板があり、仕切り板の厚さは1.4cmを測る。側板よりも仕切り板のほうが厚い。各仕切りの中の内寸は11.8cm前後で、口径11.4cmの碗がちょうど入るべきである。木箱の底の外面には「大工仁木徳兵衛 享保五子五月吉日 茶碗箱 補陀落山長尾寺 現住了意」と墨書きがある。この墨書きから享保5年（1720）5月に大工仁木徳兵衛が作った茶碗箱で、補陀落山長尾寺の什物であり、その時の住職は了意であったことがわかる。また、蓋の表には「青峰山 利平焼茶碗箱 根香寺什物」と墨書きがある。「青峰山」は根香寺の山号で、この箱は「利平焼」の茶碗箱で、根香寺の什物であることが記されている。蓋と箱本体の墨書きとは内容が異なるが、蓋と木箱本体とは樹種も異なっているので、蓋はあとで作り直されたものと考えられる。

この箱の中には蓋付碗の蓋11個体、碗5個体が収納されている。蓋の天井部径は3.8cm、口径10.4cm、高さ2.6cm、器壁は0.2～0.5cm程度を測る。蓋のつまみの上端面は無軸で、それ以外には薄い透明軸を掛け、その上から菊の花を描く。上絵の具は分厚く、盛り上がっている。菊の花5個のうち1個の花びらは青色で、4個の花びらは赤色である。茎はいずれも青色である。菊の花の周囲にはスペード状の緑色の葉がある。

碗は口径11.4cm、底径4.5cm、高さ8.6cm、器壁は0.4～0.5cmを測る。筒状を呈し、体部下部外面から高台は無軸である。口縁部から体部には透明軸を掛け、その上から5個の菊の花と葉を描く。蓋同様上絵の具は分厚く、盛り上がっている。菊の花のうち1個は青色で、4個は赤色である。茎は青色で、花の周囲には緑色の葉がみられる。高台内には回転ヘラ削りによる渦巻き状の凹みがみられる。回転ヘラ削りの方向は右回転である。蓋・碗ともに破風「高」の印銘はない。

② 色絵陶器皿

色絵陶器皿は直方体の箱に収められている。この箱の蓋には「向附皿 八枚内二枚破損」と墨書きされている。この箱の中に破損した個体を含め、色絵陶器皿は8個体ある。概ね口径14.5cm、底径7.4cm、高さ4.5cm、器壁は0.3～0.5cmを測る。蓋付碗よりも器壁が若干薄い。内型を使った型打ち成形で、口縁部は内側にくびれ、輪花を呈し、真上からみると、六枚の花びらが開いているよう見える。底部外面は無軸で、底部以外には透明軸を施す。蓋付碗に比べると軸は分厚く、貫入は大きい。体部内面には

軸の上から菊と唐草文を描く。菊の中央と唐草のつるは金色、菊は赤色と紺色である。唐草の葉は緑色で細長い。底部と体部の境界には金色と緑色で六角形を描き、その内側に梅の木と花を描く。梅の花は紺色と緑色、木は紺色、葉は緑色である。葉の緑色は蓋付碗よりも透明感がある。そのほか、赤色の花がある。底部外面の回転ヘラ削りの方向は右回転である。この皿にも破風「高」の印銘はない。なお、これらの皿はすべて露体部分や貫入が黒ずんでいる。根香寺では享保3年（1718）に大火災が発生したが、被災したためであろうか。

3. 箱書と色絵陶器

以上の色絵陶器蓋付碗と色絵陶器皿は赤・青・緑・金で花や唐草が華やかに絵付けされており、破風「高」の印はない。皿は碗よりも軸は分厚いが、器壁が薄く、瀟洒な作りである。蓋付碗の木箱には享保5年（1720）に大工仁木徳兵衛が作ったもので、長尾寺の什物であることが墨書きされている。この長尾寺は現存する寺院で、香川県さぬき市長尾西に所在する。根香寺と同じく天台宗寺院で、四国八十八カ所靈場87番札所である。長尾寺は高松藩主松平頼重が天和元年（1681）に堂塔を寄進し、元禄2年（1689）頼重の命により、真言宗から天台宗に帰宗しており、頼重との関係も深い⁽⁸⁾。箱書の内容から、この「茶碗箱」は享保5年（1720）に作られ、長尾寺の什物であったが、その後、根香寺に渡ったことがわかる。

ここで問題になるのは茶碗箱には現在納められている蓋付碗が享保5年（1720）から収納されていたかどうかということである。箱には十字の仕切りの中に蓋付碗を入れると、ちょうど納まる大きさであるので、この茶碗箱は現在収納されている蓋付碗のために作られたように思われる。この場合蓋付碗は箱が作られる享保5年（1720）5月より少し前に焼かれたことになる。

では、蓋付碗は享保年間（1716～1736）に他地域でもみられるのであろうか。肥前では17世紀終末頃からみられるようになるが、一般化されるのは18世紀後半以降である⁽⁹⁾。また、京焼では尾形乾山の築いた鳴滝乾山窯跡（1699～1712）の出土品の中に蓋付碗はみられる⁽¹⁰⁾。これらのことから、享保5年（1720）頃に理兵衛が蓋付碗を焼いていたことは不自然ではない。

理兵衛焼ではいつ頃からこのような色絵陶器を焼いているのであろうか。理兵衛焼における色絵の開始についてはまだよくわかっていない。京都粟田口から高松に転居した作兵衛重利の作と断定できる作品がほとんどないためである。作兵衛重利が京都粟田口から高松に転居したのは慶安2年（1649）である。京焼の色絵技法を大成した野々村仁清は正保4年（1647）に御室に開窯したと推定されている。したがって、作兵衛重利が京都在住時に京焼の色絵の陶技を見聞していた可能性は高い。また、紀太家には陶器に絵付けした錦絵師もいたことが紀太家由緒書からわかる。紀太家由緒書には錦絵師である岩佐家の由緒書もいっしょに綴じられている。これをみると、岩佐家は延宝3年（1675）京都より転居後、紀太家と作陶をともにしており、当時の京焼での色絵技法を理兵衛焼に取り入れたことが予想される。なお、岩佐家が高松に来た7年後の天和2年（1682）の年次が記された色絵香炉（さぬき市極楽寺所蔵）には赤色・青色・緑色・金色で上絵付けされていることから、17世紀後半には理兵衛焼で色絵陶器を作成していたことは間違いない。

18世紀前半の京焼では享保17年（1732）の箱書を持つ「色絵牡丹唐草透彫七宝繁文六角壺」（京都市西京区善峰寺所蔵）でみられるように透明釉を掛け、青と緑色の2色が厚く塗られた上絵を基調として金彩を施した比較的地味な色絵陶が典型であり⁽¹¹⁾、この時期に赤絵の具の使用はほとんどみられない。根香寺の蓋付碗は菊の花を赤絵の具で描いており、墨書きの年次の享保5年（1720）頃に焼かれたもの

かどうかは今後さらに検討を要すると思われる。また、皿は蓋付碗に比べると、作りは細かく、緑色もやや透明感が強いことから、蓋付碗よりも若干古い時期に作られたものと推定される。

4. おわりに

根香寺の蓋付碗が享保5年（1720）頃に焼かれたとすると、この時期の理兵衛は元禄17年（1704）から元文2年（1737）に焼物師として仕えた4代目理兵衛行高である。理兵衛焼の茶碗は享保7年（1722）まで將軍家へも献上されている¹²⁾が、献上されたのはこのように華やかな絵付けが施された色絵陶器であった可能性が高い。

根香寺の蓋付碗や皿をはじめ、理兵衛焼には優美な作品が数多く伝わっている。近年、江戸高松藩上屋敷、高松城跡をはじめとする近世遺跡の発掘調査が行なわれ、年代比定の研究が進む肥前陶磁器などとの共伴から理兵衛焼の製作年代を検討することが可能となってきた。だが、理兵衛焼は京焼と類似していることから、破風「高」の印銘のないものは断定し難く、18世紀中葉以前の理兵衛焼の様相については不明な点が多い。今回紹介した理兵衛焼は年次の箱書がある資料である。この年次が理兵衛焼の製作年代を示すものかどうかは再考を要すると思われるが、今後、引き続き調査を実施し、理兵衛焼の特徴とその変遷について検討を重ねたい。

最後になりましたが、本稿を成すにあたり、根香寺の方々をはじめ、尾野善裕・佐藤 隆・鈴木裕子・千葉幸信・畠中英二・平尾政幸の各氏にご教授いただきました。記して、感謝申し上げます。

註1 御厨義道「根香寺の歴史」「ミュージアム調査研究報告」第4号 香川県立ミュージアム 2012

2 森下友子「紀太家由緒書」「香川県埋蔵文化財センター研究紀要」5 香川県埋蔵文化財センター 2009

3 紀太家由緒書では紀太家の焼物師の祖を初代、初代の理兵衛を2代目としており、当代は紀太家の焼物師の初代から数え、14代目を名乗っている。ここでは、初代の理兵衛を2代目として報告する。

4 佐藤雅彦「高松焼理兵衛」「日本の美術」28 京焼 至文堂 1968

5 森下友子「理兵衛焼・富田焼」「四国・淡路の陶磁器—砥部焼・屋島焼の生産と流通—」第9回四国城下町研究会〔発表要旨・資料集〕 四国城下町研究会 2008

6 豊田基「讃岐のお庭焼について」「香川県文化財調査報告」9 香川県教育委員会 1968

7 註5と同じ

8 四国靈場第八十七番札所長尾寺公式ウェブサイト

9 大橋康二「肥前磁器の変遷—器の種類からみた—」「柴田コレクション—華麗なる古伊万里の世界」佐賀県立九州陶磁文化館 2002

10 鄭銀珍「近世における京焼と茶碗の動向—鳴滝乾山窯跡出土の碗類を中心として—」「アート・リサーチ」第10号 アートリサーチセンター 2010

11 岡佳子「近世京焼の展開」「近世信楽焼をめぐって」関西陶磁研究会 2001

12 享保7年（1722）將軍徳川吉宗が献上品の削減を令したため、高松藩の献上品の中から茶碗を削除した。このことは紀太家由緒書にも触れられており、4代目行高は焼物の献上を差し止められ、京都に御用を命ぜられて、無縫になったとある（森下友子「高松藩理兵衛焼」「幕藩体制下で例年献上された陶磁器」第1回 近世陶磁研究会 資料 近世陶磁研究会 2011）



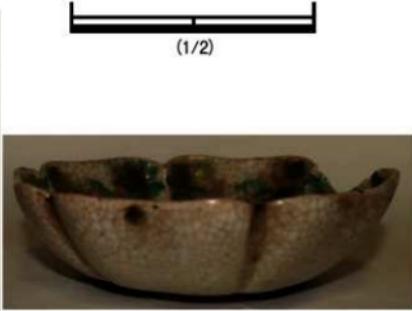
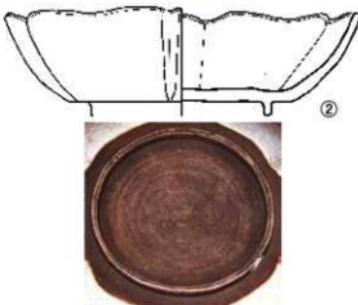
根香寺の位置



根香寺本堂



根香寺色繪蓋付碗箱



0 10cm
(1/2)

根香寺所藏理兵衛焼

寺田貞次による小豆島の考古資料調査 —小豆島で保管されてきた調査記録と未公表原稿—

乗松真也

はじめに

小豆島は香川県の北東部、備讃瀬戸の東端にあり、播磨灘の西端に位置する。面積は約150km²、現在の人口は約30,000人である。島内にふたつの自治体があり、北西部が小豆郡土庄町、南東部が小豆郡小豆島町である。

1945年（昭和20）3月、小豆郡瀬崎村（現・小豆郡土庄町瀬崎）で富丘頂上古墳が発見され、その調査に赴いたのが、高松市在住で高松経済専門学校（現・香川大学）教授の寺田貞次^(注1)だった。小豆島での数日間の調査を終えた寺田は、調査記録や出土資料の一部を高松に一旦持ち帰った。しかし、7月の高松空襲によって持ち帰った資料は破碎、変形し、調査記録も亡失、さらに寺田も1946年春に亡くなつた。後に福家慧衛^(注2)が地元での聞き取り調査を行い、それをもとに作成したとされる報告（福家1950）が、富丘頂上古墳にかんする唯一の公表された調査成果であった。

ところが、小豆島には寺田による日誌や写真などの調査記録、未公表原稿などが保管されており^(注3)、これらは富丘頂上古墳の調査成果を理解するためには重要な史料であることがわかった。また、当時の小豆島の考古資料についてまとめたものもあり、こちらも小豆島の考古学史上貴重な史料といえる。よって、本稿では寺田の残した調査記録や未公表原稿を紹介し、その史料的価値について言及したい^(注4)。

1. 史料の概要

富丘八幡神社で保管されてきた寺田貞次関連史料は、内容が大きく五つに分かれる。【A】「小豆島、瀬崎八幡社古墳調査」、【B】富丘頂上古墳の調査にかんする写真、【C】「瀬崎八幡社裏古墳」、【D】「上代ノ讃岐」、【E】寺田家の書簡、である。【A】は現地での調査時に作成された日誌、記録である。【B】の写真も調査時に現地で撮影されたものだろう。【C】・【D】は、高松空襲後に京都へと戻った寺田が病床で書いたものである。【C】は富丘頂上古墳の調査報告書、【D】は小豆島の考古資料についてまとめた原稿である。【E】は、寺田および、寺田の妻から富丘八幡神社宮司へあてた書簡となっている。

2. 史料の解説

（1）史料 【A】「小豆島、瀬崎八幡社古墳調査」

この史料はノートを切り取ったと思われるもので、1枚（表裏2ページ）ごとに10~13の番号が振られている。番号の筆跡は史料記載の数字によく似ており、寺田のものとみていいだろう。この史料は現在、富丘八幡神社で綴じられているが、この状態で読むと内容がつながらない。綴じ方向を逆にして表裏を反対すれば内容に矛盾がなくなる。こちらが本来の表裏と推定して、【A】の内容を順に【A-10表】～【A-13裏】とする。

【A-10表】 玉と石器の略側図が掲載されている。玉は「硝子製薄紫 稍大小アリ 七個」、「南京玉 五個（黄色四、紫一）」の2種類あり、「以上古墳出土」とある。またサスカイト製の石礫と打製石剣に

は「附近出土石器」とある。次ページ【A-10裏】が富丘頂上古墳調査記録の始まりであることはほぼ間違いない。であれば、このページの記録は富丘頂上古墳と無関係とみることができるだろう。詳細は後述するが、このページが後に富丘頂上古墳の副葬品目を混乱させる原因となった。

【A-10裏】～【A-11裏】 富丘頂上古墳の調査について時系列で記されている。3月29日10時30分ころ、富丘八幡神社本殿裏にある円形の小丘を80～90cm掘り下げたところ、主体部の石材にあたったようである。香川県小豆島地方事務所長から県神祇教学課を経由して寺田に連絡があったが不在のため、県史編纂室に知らせが行った。夕方帰宅した寺田は松浦正一(著)から連絡を受けた。翌日（30日）、寺田は松浦を訪ねるが、松浦が不在のため県警察課と打ち合わせを行った。そして調査に向かうことになったが、濃霧で船が欠航、出航を待つ客も多いため調査は後日とし、あらためて4月1日9時に高松を出発、11時、土庄に着いた。寺田は地元関係者との面会や昼食を済ませ、14時に古墳を訪れた。この後、調査に着手するのだろう。

ここでは調査に至る流れについて触れておきたい。小豆島で古墳が発見された際、県神祇教学課からも、松浦からも寺田に連絡がいっている。当時、香川県には寺田以外にも発掘調査に携わる人物がいたことを考えると、寺田にだけ連絡があるのは特別な理由があるようにも思える。これ以前、小豆島のいくつかの調査に寺田が関わっていることから（寺田1935・1937・1939）、寺田は小豆島の調査担当者という位置づけだったのかもしれない。

この後、主体部1の平面図とともに、出土位置別に（1）～（4）のグループに分けて副葬品の解説がある。また、平面図の南半分は空白だが、この部分は調査していない可能性がある。この点については史料【C】の解説で触れる。

【12表】～【13表】 遺物の略測図。図には番号が振られており、石室の平面図中の番号と対応しているようだ。なお、現在伝わる鏡は高松空襲で破損、変形しているが、この図からは本来の直径を知ることができる。

【13裏】 森井正所蔵の「豊島村神子浜出土」の縄文土器と、「豊島村袖ノ浜へ行ク小道」の石剣（サスカイト製の打製石剣か）の略測図がある。森井正は小豆島在住の郷土史家で、寺田が調査中に実見したのだろう。縄文土器は豊島の傳子ヶ浜遺跡、石剣は同島、桶遺跡の出土資料と思われる。

（2）史料【B】

富丘頂上古墳の調査に関する写真。8枚あり、それぞれ史料B-1～8とする。

【B-1】 墳丘を掘り下げ天井石らしきものが見えている。富丘頂上古墳は2基の主体部をもつが、どちらの石が見えているのかはわからない。8枚のなかでは最も早い段階で撮影されたものだろう。

【B-2】 主体部2基の天井部が露出している。奥に神社拝殿が写っているので北から南に向かって撮影されたことがわかる。左側が主体部1、右側が主体部2である。軍服を着用した3人は発掘作業に携わっていた人たちと思われる。

【B-3】 2基の主体部の天井部が写っている。右側の天井石がB-2の右側（主体部2）と同じなので北から撮影した写真であることが確実である。

【B-4】 主体部1の天井部を外した状態。右手前に主体部2が見えるので、北からの撮影である。主体部1は板石積みの堅穴式石室で、手前中央（北寄り）に人間の頭骨がある。そのさらに北側に1枚

の鏡が見える。頭骨・鏡から東壁沿いには数振の鉄刀らしきものが配置されている。

【B-5】 天井部を外した主体部2の内部で、ほぼ全身の人骨がある。主体部構造は板石を縦に並べた箱式石棺。

【B-6】 鉄器と中心とした遺物の写真。焼失したとされる木質遺物らしきものもある。

【B-7】 鏡1枚、銅鏡2個と木質遺物らしきものの写真。寺田の保管中、高松空襲にあったため、鏡は割れて変形、銅鏡も縁が細かく欠損、木質遺物に至っては現存していない。よって、これらの遺物については出土当時の状況を伝える良好な史料といえる。

【B-8】 富丘八幡神社拝殿を背景に8人の人物が収まっている。おそらく寺田と地元の有力人物らと思われる。

(3) 史料【C】「淵崎八幡神社裏古墳」

寺田の自筆原稿。まず、1日目から6日目までの調査の経緯が記される。4日目は降雨のため調査ができず、木下空太^{（注釈）}を訪ね、古鏡と銅鏡を見せている。木下は島の有力者であるが、考古資料に関心があったのだろう。5日目には「手伝ノ兵士來ラズ為ニ後仕末出来ズ」とあり、この日も調査を行っていない。結局、宮司の高尾實爾に後始末（おそらく埋め戻し）を依頼している。当初から5日目で調査終了の予定だったようと思われる。6日目には小豆島を後にして高松に戻る。その際、「調査報告ハ県史蹟報告トナス也」、「調査者記録シ社務所ニ保存スルコトモ約シ」とあることから、当時、香川県史蹟名勝天然紀年物調査会が刊行していた「史蹟名勝天然紀念物報告」に調査報告を掲載し、それとは別に調査記録を社務所に保存することを約束したことがわかる。

この後、発見動機や届出に加えて、古墳の構造や副葬品の記載が続く。人骨については、木下の助言で軍医に鑑定してもらったようだ。

(4) 史料【D】「上代ノ讃岐」

「上代ノ讃岐」というタイトルだが、内容は寺田が見聞きした小豆島の遺跡や遺物などが記されている。土庄から始まり、小豆島を反時計周りたどって記述されている。寺田は小豆島に足繁く通って調査していたらしく、島での人脈も豊富であったようだ。当時、小豆島の考古資料について最も精通していたのが寺田だったのかもしれない。記載されている内容を見ると現在では知られていない情報も多い。

(5) 史料【E】

寺田と妻の千代子は富丘八幡神社の高尾宮司へ何度も書簡を送っている。

【昭和20年（1945）9月27日付】 高松空襲（7月4日）により高松にあった寺田宅が被害を受け、報告書と遺物（鏡、銅鏡2点、木製造物と思われる）が焼失したことを詫びている。空襲後、寺田は京都へと戻っているようだが、再度報告書を作成するため、写真を送付して欲しいと願い出ている。

【昭和20年11月6日付】 寺田は空襲後の高松宅を搜索、破損した鏡と銅鏡を発見、これらの遺物を高松から高尾へ送付する旨が記されている。

【昭和21年1月27日付】 送付した遺物が無事に到着したかどうか確認している。

【昭和21年2月21日付】 高尾から野菜を送ってもらったことに対する礼状である。

【昭和21年6月4日付】 寺田の妻の千代子による書簡。この時点で寺田は亡くなっている。前年の6月には報告書が完成し、京都出張が重なり忙しい身の寺田に代わって千代子と息子が小豆島へ報告書と遺物を届ける算段になっていたが、高松空襲により報告書が失われてしまったとある。寺田は11月20日ころに体調を崩し、再度、富丘八幡神社の報告書などの原稿を書き上げた後（5月20日か）、亡くなつたようである。【A】・【C】・【D】と【B】の一部はこの書簡と合わせて千代子が高尾あてに送付したものと思われる。

この後、千代子からの書簡が数通あり、寺田家は高尾としばらく連絡を取り合っていたようだ。

3. 史料の意義

(1) 富丘頂上古墳の調査データ

現在、印刷物となっている富丘頂上古墳にかんする報告は、福家惣衛による「富丘山頂上古墳」である（福家1950）。この報告によれば、福家は1949年（昭和24）11月27日に現地を訪れ、当時のことを知る人物や官司の高尾定爾から説明を受けたようだ。報告は文章と主体部の写真で構成されるが、基本的な内容は寺田による【C】と変わらない。写真も【B】である。つまり、福家は神社で寺田の調査記録や原稿を実見して、それをもとに報告を作成しているのである。また、寺田は【A】・【C】で主体部から玉が出土していないことを指摘している。福家も報告の玉類の項で「管玉曲玉等は出土しない」としているにも関わらず、「されど硝子製薄紫の小玉七個、稍大小あり、（略）が出た」、「南京玉五個 黄色四 紫一（略）も出た」と記述している。福家の報告以後、富丘頂上古墳について触れる場合にはこの報告が引用され、副葬品として鏡や鉄剣などに加えて玉も挙げられる（松本1983など）。福家報告による玉の記述は、【A-10表】のそれと同じである。前述のとおり、【A-10表】は富丘頂上古墳とは関連しない蓋然性が高い。福家は、神社に残されていた史料【A】を見て、【A-10表】に記載されている玉を富丘頂上古墳の副葬品と勘違いしたのだろう。

また、福家の報告では副葬品の出土位置について詳しく述べられていない（【C】をベースとしているためか）、主体部写真的印刷状態も芳しくない。しかし、【A】・【B】・【C】を詳しく検討すると、副葬品の出土位置がある程度判明する（追加）。

さらに、【A】には第1主体部南半部の調査を4日目以降に行うとし、【C】では4日以降は降雨や労力不足のため調査できていないとある。すなわち、第1主体部南半部の調査は行われておらず、現在知られている遺物以外にも同主体部の副葬品が存在する可能性を指摘できる。

(2) 小豆島の遺跡データ

【D】には36件の遺跡が記されている。遺跡の記述内容をもとに、現在の遺跡台帳や自治体史と照合を行った（第1表）。その結果、【D】記載の遺跡36件のうち、現在遺跡として認識されているのは可能性のあるものを含めて19件となった。伝聞情報のみで寺田自身が確認できていない遺跡もあること、寺田の記載内容では位置特定が困難なものもあることを考慮すれば36件すべてが遺跡とは限らない。この点を差し引いても、【D】記載遺跡中には現在では知られていない遺跡がいくつかありそうだ。特に、丘陵上や斜面地での弥生土器や石鏃、剥片、石斧（伐採斧）の出土が目立ち、これらは立地や遺物を考えれば弥生時代中期後葉の遺跡の可能性がある。仮にそうであれば、弥生時代中期後葉に遺跡が急増し、

半数が丘陵上や山頂に位置する児島（大久保2002）とよく似た傾向を示す。さらに、海浜部も含めた「多様な環境での居住・生活スタイルであった」（乗松2006）当該期の備讃瀬戸の状況を、さらに補う資料にもなりうる。また、出土遺物を保管していた人物や保管場所も記されており、今後、それらが発見されれば、この記載とあわせて検討することで資料価値が高まるかもしれない。特に木下空太（忠次郎）の別荘には島内の考古資料がいくつも持ち込まれ、保管されていたようである。木下が保管していた資料の行方が判明すれば、小豆島の考古資料データはより充実したものとなるだろう。

なお、福家1950では富丘頂上古墳の報告の最後に小豆郡の遺跡が列挙されているが、これらは【A-13裏】の森井所蔵資料および【D】記載のデータと酷似する。この部分についても、福家は寺田の遺稿に依っていたことが明らかである。

おわりに

以上、小豆島で保管されてきた寺田の調査記録や未公表原稿などを紹介した。寺田や千代子の書簡からは、空襲で富丘頂上古墳出土資料を破損、焼失したことに対する遺憾の意に加えて、報告作成に対する寺田の強い意志を感じられる。寺田が病床に伏しても筆を走らせ続けたのは、富丘頂上古墳調査時の高尾との約束や、何年にもわたる小豆島の調査で協力を得た人々への恩返しの気持ちもあったのかもしれない。寺田の作業を活かすためには、今回紹介した史料を検討し、積極的に使っていく必要があると考える。

史料の掲載にあたっては、富丘八幡神社、同神社氏子、土庄町教育委員会にご配慮いただいた。また、史料の翻刻には三木倍美氏の多大な協力を得た。

註

- 1 1883～1946年。1940年から高松商業高等専門学校（後に高松経済専門学校と改称）教授。香川県郷土研究会会长なども務めた。
- 2 1884～1971年。1941年まで教員、その後、郷土史家。
- 3 史料【B】の写真は土庄町教育委員会、それ以外の史料は富丘八幡神社で保管されている。
- 4 小豆島では寺田の報告が知られていたため、自治体史の記録や富丘頂上古墳出土遺物の文化財指定（土庄町指定）にあたっては、寺田報告が使われている。
- 5 1899年生まれ。教員。香川県文化財専門委員なども務めた。
- 6 木下忠次郎。丸金醤油株式会社（現・マルキン忠勇株式会社）初代社長。
- 7 寺田の調査記録や未公表原稿をもとに富丘頂上古墳の再検討を行った。その成果については別稿（乗松・高上2013）を準備中である。

文献

- 大久保徹也 2002 「備讃地域における弥生後期土器製塙の特質」「環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－」
川野正雄編 1974 「内海町史」
川野正雄編 1984 「池田町史」
寺田貞次 1935 「小豆島の銅鐸」『考古学雑誌』25－3
寺田貞次 1937 「銅鐸銅劍を出せる小豆島安田遺跡」「考古学』8－7
寺田貞次 1939 「瀬崎八幡山の古墳」史蹟名勝天然紀念物調査報告調査会「史蹟名勝天然紀念物調査報告」10

徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 1998「徳島文理大学文学部共同研究 小豆島」
土庄町誌編集委員会編 1971「土庄町誌」
乗松真也 2006「弥生時代中期における漁業システムの変化と『高地性集落』」『古代文化』58-2
乗松真也・高上 拓 2013「富丘山上古墳の研究」『香川考古』13 （予定）
福家惣衛 1950「富丘山上古墳」香川県教育委員会「香川県史跡名勝天然紀念物調査報告」14
松本敏三 1983「富丘山上古墳」日本考古学協会昭和58年度大会 香川県実行委員会編「香川の前期古墳」

第1図 史料[D]記載遺跡位置図



第1表

	遺跡	内序	備考	遺跡名	現状	文献
1	大水天橋社の上流	石橋		一 新石器時代・古墳	新石器古墳	[小豆島]
2	社後の南北に走る古道の高所	組合石塀・石垣	見込み多く、土生の古道風に依て之を 見た。	新石器古墳	新石器古墳	通路カード
3	断続地方より北を越した所の断面	水式土器		火・土生・土器(能登多數・中崩少數)・石器	火・土生・土器(能登多數・中崩少數)・石器	
4	地山と施設の上	施設・遺物		土器・石器	川頭	[十日町法]
5	朝の南端に亘る小丘(寺子屋の裏)	施設・土器		余飯山・土器・石器・灰土・瓦	灰土・瓦・高杯・灰土・瓦	通路カード
6	施設の南端の島上	石橋	國立学校の先生から(施設)聞いた。	土器・石器	灰土・瓦・土器・瓦	寺田(1929)・福家 1950
7	丘庄と島を隔てて西ぐに走る新御油精工場線	石橋	(石橋は)同年上文(八)家所産	高丘山・土器・瓦	円鏡(夢穴穴式)・輪式石棺・灰土	
8	庄宮天橋社の正面	石橋	平野の高女畠五重櫻の小岡原守土	高丘山・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	
9	御油学校の南側	石橋	平野から源流が黒瀬川の河口平地に出る原の 奥の黒瀬川の源流の北に向かって出る長い 石橋。	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
10	大黒山の南側の斜面	石橋	高丘山の土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
11	周辺の島原山・東山原山の北に向かって走る長い 石橋の源流山間に在る所の後方	石橋	高丘山の土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
12	二つの島原山間に在る所の後方	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
13	会津より一の水波となるぐれの断面の断面	水式土器片	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
14	周辺の島原山間に在る所の後方	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
15	周辺の島原山に在る所の後方	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
16	庄宮天橋社の北に向かって走る長い 石橋の源流山間に在る所の後方	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
17	手取川に下ること勾配を以て有名な一等地の所	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
18	手取川の南側の島原山の平地	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
19	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
20	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
21	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
22	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
23	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
24	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
25	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
26	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
27	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
28	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
29	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
30	庄宮天橋社の周囲に下つた(萬)溝岸井等に之に 接する教育場所の西側の断面	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	
31	龜山	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	[内海町史]
32	若ヶ谷の小半地	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	通路カード
33	通田木山の山頂に当る所	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	[内海町史]・寺 山(1935-1937)
34	寺山のある鬼見近	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	通路カード
35	寺山の北の山	石橋	火・土生・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	火・土生・土器・瓦	通路カード
36	北半洋岸で風の影響による旧道	石橋・長三丁位	一(火)見されねば、同氏が保管	高丘山・土器・瓦	高丘山・土器・瓦	

史料【A】 小豆島、瀬崎八幡社古墳調

【10裏】

硝子製薄紫 種大小アリ 七個

(註A)

附近出土石器 石劍二 サスカイト

石劍一個

(註B)

【10裏】→【11裏】

四月一日(晴)小豆島、瀬崎八幡社古墳調

九時出帆正宗丸ニテ出立、十一時土庄着、地方事務所訪

地方事務官(小豆島地方事務所長)松谷栄氏

県視学吉井熊二氏面会、案内ヲ受ケ富岳山薦満洋荘休憩、瀬崎村長森口寛謙氏始メ八幡神社氏子

瀬崎村赤櫻屋(アコヤ)高橋久一

全 北山 平井多四郎

警察部長水田勝二氏ニ面会

村長厚意、当地特産牛肉すきやき鑑賞受ケ他ノ諸氏ハ社務所ニテ食事セラル

午後二時登山、社務所三至リ参拝ノ上、発見地三至ル

船舶特別幹部候補生隊 若瀬隊

船長松山作二中佐

来会ヲ受ク宮本安(ヒロシ)中尉並ニ当日発見ニ關係セシ山崎一雄少尉モ来会サル

山崎氏ニヨレハ發見ハ三百廿九日前十時半頃ナリシ由、此地ハ八幡社本殿裏ノ円頂形地ニテ頂上ハ以前

絆塙トシテ知ラレ古鏡ニ面出土セシ所、自分モカツテ調査セシ地ナリ

地方ノ崇敬地ニシテば横木笛生シ居リシガ今回軍用トナリ頂上中央ア円形ニ掘リ下ク約8、90 C程

掘リ下ケシ所古墳石室ニ当リシケリ当時間係サレシ山崎一雄少尉ニヨレバ三月廿九日十時半頃ナリシ

ト、次テ地鎮式? 慶靈祭? ヲ行コト、ナリ 地方事務所長ノ来会ヲ求メラル、事務所長初メテ知ル所

トナリコ、二県神祇教説講テテ調査ヲ依頼サレシナリ

県ノ佐々木係ヨリ学校電話小生不在ノタメ県史編纂室ニ連絡以来アリ 松浦正一氏ヨリ片警宅ニ通達ア

リ 小生タ姓宇承知翌日松浦氏訪 氏不在ノ為県出頭、警察課原氏ト打合セ、土庄ノ地方事務所遂カ

に警察署ニ電話、今明日中二□上ノ旨通知ス

此日、本年初チノ漁業、船火航、機械駆前ハ之カタメ本土行客殊ニ此頃ハ口光者ノ往復モアリ方々長蛇

ノ列ヲナス 土庄通モ十二時半出帆良込カズ口□□□中止帰宅 午後晴レシモ□□□明口トス

(註B)

(1) 北壁ヨリ1 m 80 c所、東壁ニ接シ刀片? 一個少シ南ニテ壁石ニ□ニハサマリ刀片? 一ツ

此兩片ノ中間近ヨリ鋼鐵身一枚

(註 C)

(2)

奥壁ヨリ 50 c 東壁ヨリ 15 c 所 此邊ニモ鋼鐵一個

(註 D)

(3)

石室ノ西北隔壁ニ接シテ

(註 E)

此他、東壁ニ接シ刀片鐵刃ナド各所散在セリ

(註 F)

(4)

奥壁北ヨリ 1 m 20 c ノ所中央、西壁ヨリ 40 c 東壁ヨリ 35 c ノ所、鏡一面 表面ヲ上ニシテ參見、此附近ハ朱色土塗牆厚、且褐色アリシゴク脆弱ニテスグ粉末状トナリ、且細線状ヲナシ木質ノ如シ軍隊手伝ノ井上鷹一君□シキキニ之ヲ称セリ、鏡ヲ取除キシ所 下ハ鏡裏面ノ枚様型ヲ呈シ繪麗ナシシヤウモ附着シトルニ忍ビサル□ナリキ 此上士ヲトリシ時 下ニハ井上君ノ申セシ如ク明ニ木質片ガ發見サレキ之ニヨリ鏡ハ明ニ木製品ノ上ニセアリシカ□木箱ニ納メアリシカラ繫シ得カタリ
且此下邊土ハ□クカタク、ねり土ノ如キ□アリ 鏡ヲオク處ノタメねり土ニツクリシモノ?
本□□小片モコノ邊ニテ發見セリ
玉ノ類ハ遂ニ見當タラサリキ)

四月三日ノ調査ハコレダケニテ中止 南半ハ翌日ノ調査ニユヅル

【12表】

(註 G)

【12表】

(註 H)

【13表】

(註 I)

【13表】

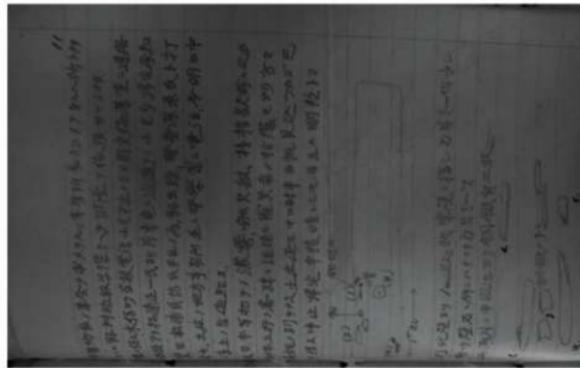
(註 J)

J I H G F E D C B A 許
第1主体部 磬音品配置略圖圖 (部分)
第1主体部 磬音品配置略圖圖 (部分)
第1主体部 磬音品配置略圖圖 (部分)
略圖圖 磬鐵 2 点 鐸 1 点
略圖圖 石琴 ? 1 点 鐌刀劍 3 点 不明鍊器 ? 4 点
繩文土器 1 点 打鑿石劍 ? 1 点

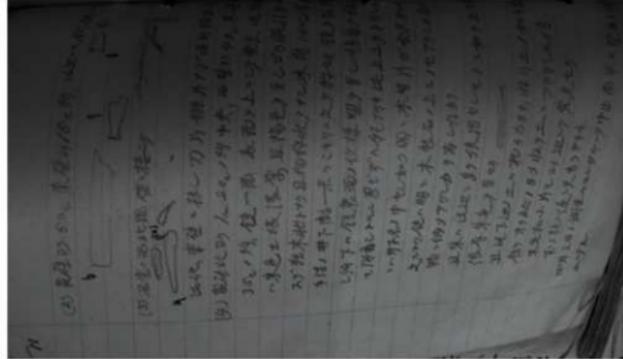
[A-10表]



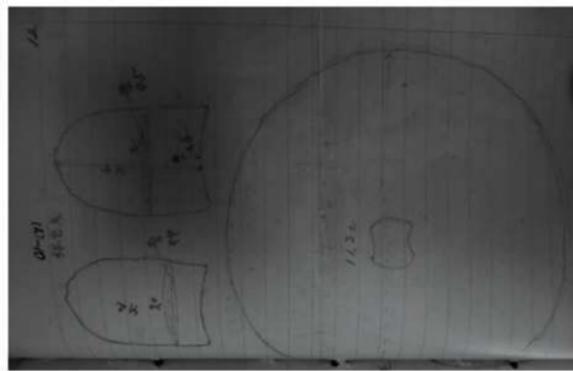
[A-11表]



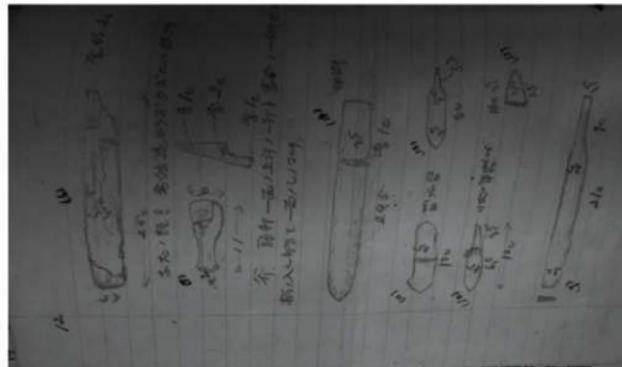
[A-11表]



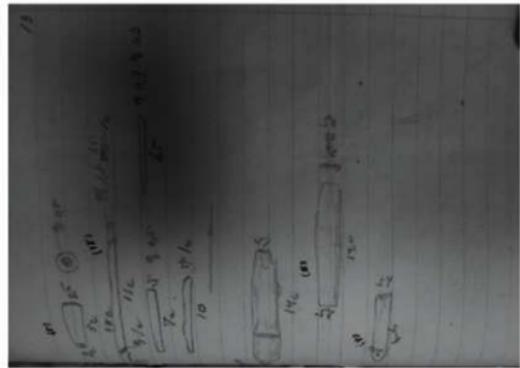
[A-12表]



[A-12表]



[A-13表]



[A-13圖]



史料 [B]
[B-1]



[B-3]



[B-2]



[B-7]



[B-8]



[B-4]



[B-5]



[B-6]



史料【C】 潤崎八幡社裏古墳

小豆島調査二回スル故人遺稿ノ写シ

香川県小豆郡潤崎村 八幡神社 所蔵

潤崎八幡社裏古墳

土庄ノ地方事務所カラ潤崎の八幡社裏ア古墳方発見サレタカラ調査シテ呉トノ通達ガアツノア申館調査委員寺田貞次出張調査シタ 地方各位ノ厚意テ八幡社社務所ア滞留調査スル

第一日

地方事務所ノ案内ニテ警察署長同道潤崎存置ノ軍ト打合セノ上発見地潤崎八幡社ニ至リ社掌高尾實爾氏ト会ス 潤崎大輝岡村長氏子縦代各位並ニ井上文八郎氏モ来会アリ 調査打合セラナス 氏子ニハ古墳移転説アリシモ余ノ意見ニ従ヒ其保存ニ決シ愈調査ニ決ス 午後現場視察軍部隊長等モ来会アリ

第二日

古墳ハ社殿裏小丘上ニテ二個ノ組合石棺ヲ藏ス 先ツ発見ノ両石室ノ破壊口ヲ再開キ其組合石室タルコトヲ確メ其中ニ再び置カレシ遺物附懸ニ納メシ體拝見ス 後遺物ハ社務所ニ保管シ兩棺上ノ泥土ヲトリ除キ兩棺蓋石ヲ露出セシメ之ヲ測定撮影ス

第三日

大石室蓋取除キ室内調査前ニ取出セシ遺物以外ニ古鏡刀子頭飾頭飾二個ヲ発見ス

第四日

降雨ノ為調査出来ズ 西村ニ木下空太翁訪問報告 発見ノ遺物中古鏡及頭飾ヲ御覧ニ供ス

第五日

手伝ノ兵士来ラズ為ニ後仕末出来ズ 高尾氏ニ依頼調査終ルコトアス

第六日

調査報告ハ県史蹟報告トナス他 和紙ニ調査者記録シ社務所ニ保存スルコトモ約シ傳高ス

発見地

香川県小豆郡潤崎村潤崎八幡神社社殿裏小丘上

此小丘ハ富岳山塊ノ最高所ニ当リ自然ノ円頂地テアル 後世其周ニ細道を作リ今ハ人為的ニ整造セシ円墳形ヲ呈ス 此頂上ハ後世絆塚トシテ利用サレシ処テ絆塚ハ先年発掘古鏡等遺物ヲ発見シテ所ア從来一般ニ絆塚トシテ祀ラレテキタ処テアル

発見動機

昭和年中ノ世界大戦陸軍ニテハ此丘上ニ機関砲ヲ装置スル為頂上ヲ掘り下シ隕然ニモ石室ヲ發見ス
ルニ至フモノアアル

届出

発見セシ石室ハ二個ニシテ何レモ其ノ一部が破壊サレタノア内部ヲ覗ヒシ一箇ニハ人骨ヲ見頭骨モ觸ハ
リ居ルヲ發見、他ニハ刀片等鉄片ヲ多数發見シタ 依ツテ社務所備付ノ白木棺櫃ニ此等遺物ヲ納メテ一
石室間に奉安シテ破壊セシ個所ヲ元ノ如ク聞シテ土ヲ覆し墳ノ周圍ニメ網ヲ張リテ出入ヲ禁シ土庄地方
事務所ニ報告セラレタ 即チ地方事務所ヨリ県係連絡ヲ取り正式調査トナツタモノアアル

調査

県ヨリハ史蹟名勝天然紀念物調査委員高松經濟専門学校名誉教授寺田貞次氏出張調査スルコト、ナリシ
前述ノ數日亘り調査ス

調査方法

八幡神社氏子總代ハ調査委員到着ノ日社務所ニ參集協議ノ上古墳ヲ移転スル意向ナリシガ調査委員ノ意
見ニ依リ移転ヲ中止シ現状ノ儘ニテ軍事上設備ヲ施シ墳ハ調査ノ後田鷹復シ其上ニ石祠ヲ置キテ保存調
査ノ結果ハ之ヲ報告書トシテ遺物ト共ニ社務所ニ保存スルコト、ナル

発見石室

石室ハ二基ニシテ東西ノ方向ニ相並シテ築造サレ、一基ハ其大サヲ異ニシ東側ノハ大キク西側ノハ小形テ
少シ食ヒ通ビニ並ベラテキル 大石室ハ北ニヨリ小石室ハ南ニヨリ但シ位置ハ高低ノ關係ヲツクラス
同萬ノ位置ニ置カレ居リ

構造

石室ハ安山岩質平板石ヲ用ヒテ墓棺型ニ造レル所謂圓弧式石室ニ組合石室（石棺）ト称スルモノア
ル 最初上部ノ土壤ヲ取除キシ所ニヨレバ兩石室共上部ニハ數枚ノ平板石ヲ並ベテ蓋トナシ其間隙ニハ
更ニ小平板石ヲ以テ土砂ノ侵入ヲ防ギ此兩石室ノ蓋石ノ間ニハ明ノ平板石ヲ並ベテ其間ノ通縫ヲ保テル
形跡ヲ見タリ 其平板石ノ寸法ハ概々幾失セシ為記載シ得ズ 石室ノ周壁ハ兩石室其積方ヲ異ニシ小石
室ノ方ハ平板石ヲ縱ニシテ之ヲ築キ大石室ノ方ハ比較的小形平板石ヲ用ヒテ煉瓦式ニ横ニ積重ネテ周壁
ヲ作り居レリ 頭骨ノ部分ニハ枕石ノ置カル、モノガアルガ小石室テハ頭骨下ニ小平板石一枚ヲ置キ枕
トナリ居タリ

室ノ形態ハ兩室共ニ北端最モ広ク南端ニ向ツテ狹ク造ラル 此点モ諸城ニ普通ナル組合石室ト異ラズ
大サハ大形ノ方ハ長四米□位 幅ハ一米□位、深サハ一米□足ラズナリ 小形ノ方ハ長ニ米□ 幅一
位 深一
幅位ナリ

遺物

大形石室ニハ頭骨若干個ト副葬品トシテ古鏡一面 刀大小數振 刀子數本 鉄鏃數本 伴機械器若干個

並ニ鋼鐵式個發見 小形石室ニハ礦業品ノ發見ナク遺骸ハ頭骨ヲ初メ胸骨兩手腕脚骨マテ完全ニ残り居レリ（写真）

遺骨

木下空太翁ハ遺骨ハ専門家ノ鑑定ヲ乞ハレ度注意アリシモ當時軍中ニ専門ノ軍医居ラシア以テ氏ノ研究ヲ乞ヒシ處氏ハ頭骨ニ就キテ測定ヲモナシ 齒ノ状態等ヲモ調べ大頭骨等ヨリモ推シ大形石室ノ主ハ男子 小形石室ノ方ハ婦人ノ如ク考ヘラルトノ意見ニ附付ケリ 頭骨ハ明ニ現今人ノ頭骨ニ比シ差異ヲ認メズ 唯手が稍長キ感アルノミナリトノ意見ナリキ

朱使用遺骨ノ頭骨ニハ朱ノ附着ヲ見 素ニ大形石室ノ頭骨ニハ其殘着シク繪圖ナル紅色ヲ呈シ且頭骨下ノ床土ハ他ノ部分ヨリモ硬ニシテ朱ノ残存多ク古鏡ハ其朱色土墳ノ部分ヨリ發見 土ニハ古鏡ノ紋様ヲトメ繪圖ナリキ 又小石室ノ方ニテハ個體平板石蓋ノ内側ニモ朱色アトメキタリ 組合石室ニハ普通朱ノ使用サレ居ルモノナルガ此石室ニ依テモ同様朱ヲ使用セシヲ認ム

鏡

大形石室ノ中央ヨリ稍北ニ偏シタ所頭骨ト略同所ニテ發見ス 写真ノ如キモノニテ仿（ほう）製鏡ナレド紋様ハヨク出来居レリ寸法モ測リシガ不幸災火ニ会シ破損セシハ遺鏡 現物ハ社ニテ保管ス

鋼鐵

大形石室ノ東壁床上ニ置カレシモノト見エ東壁下ニ接シ頭骨ノ東側ニ巻個並ニ夫ヨリ稍北ニ偏シテ巻個都合式巻發見セリ 其形態ハ写真ノ如クニテ長サ幅幅一極下部中央ニ巻個ノ小孔ヲ穿テリ 此種鐵ハハ譲岐ニテハ自分ニハ最初ノ發見ニテ珍珍シキ遺物ト考ヘラル 災火ノ會シ色彩變化セシモ發見當時ハ綠銹繪圖ナリキ 観ト共ニ社ニテ保存ス

鉄錠

銅錠ノ他鉄錠ハ多數發見大石室ノ頭骨ノ東壁下ヨリ其北部並ニ石室ノ西北隅ニテ數個宛發見ス 何レモ破壊シ居リシ為本數ヲ知ルコト能ハズ 其形態モ多少差異アリシカト思ハルモ確實ニ知リ難シ 但大サハ何レモ小サク大形品ハ見当ラサリキ

刀

大小數本アリシガ如ク頭骨ノ東壁床上ニト並行シテ置カレアリ南西壁ノ北部ニモアリシヤウナレド既ニ腐食シテ明ヲ失ビ居レリ

短刀中ノ一本ニハ柄ト觸部トノ間ニ木質ヲ残シ居リ 之ヲ遺物トシテ称ラシキ所ナリシガ災火ニテ燃失遺憾ナリ

ナタ

斧様鍛器

なたノ如キ形鐵鍛器ア刀ヨリモ少シ北ニ偏シテ東壁下床上ヨリ發見シタ 此種ノ鍛器モ發見少キ方ニ付称ラント思ハル

銃斧

之ハ頭骨ノ東壁下及西壁北部下ヨリ発見三個皆出土セリ此種遺物ハ他ニテモヨク出土スルモノナレド此古墳ヨリモ出土セシコトハ有意義ト思ハル

遺物ハ以上ノ如クナレド玉類ノ出土ナカリシハ稍異様ノ感ニ打タレキ

上代ノ遺物

昭和廿一年病床中記す

調査ノート全部羅文焼失の為地名人名を忘却又遺物も寸法等忘却故に記述急歎括に過さざるを遺憾とする
城南

小豆郡内海島中東部を占むる一郡で西方に散在する壇龜諸島と並んで先史文化調査上重要地域である
小豆本島の他豊島並に小豆島を含んでゐる地域は殆全部山岳性で小豆本島は土庄の辺で一島として觀られ此間に土庄港があり北部は急峻で湾人の利用東北には福田の小湾形があるのみである 本島の南側には池田湾草壁の湾を有し地形も稍低緩である 先史遺跡は此關係によつて出来てゐるも□である土庄附近では大木戸八幡社の丘陵がよく知られ石獣出土地と聞く 採集し得なかつたけれども社後南北に連する背の高所には組合石室の埋藏も石臼等の散在も認められた 殊に南岸地方より此丘を越した所の斜面には弥生式土器の発見多く採集品は土庄の古道具に依て之を見た 此地海岸では土庄人家の西端に近き小丘城山と称する小丘は古墳伝説もあり遺物出土地と聞き又町の南部に孤立立せる小丘（寺院裏）上では弥生式墓の埋藏を認めア風光明媚なる奥島の最南端の一島上にて石獣一個を発見した 海浜に於ける遺物は未だ之を見なかつた

小豆本島では土庄と橋を隔て、直ぐ北に位する綾糸面地筋工場国民学校所在地に当る瀬崎村あこや（赤穂屋）では早くから遺物発見地として知られ国民学校の先生から石獣の採集を聞いた事がある 此村で景勝地として有名な瀬崎の八幡宮丘陵は遺跡に富み丘頂より東南に細長く下れる山尾の先端は古墳群地であると共に遺物散在地で石岡の散在を見石獣一個を探集した（井上文八郎氏案内調査の際発見遺物は同家所藏）此丘の東南に突出せる半島性丘陵の如き調査したが遺物らしきものを見なかつた
瀬崎は本島背梁山岳より流下する溪流の海への注入地をなし溪流两岸共に急峻な地形を呈してゐる 然しかし唯一の交通路は此谷に於いて開かれ北岸に沿ひて道路は山を越し北海岸地方を連絡して居り途中も間欠烟地をなし馬越小馬越等から寺院を越し北岸の満宮地方にも通じて居る 然しかし海岸は全くの急崖で森林地を呈している 従て遺物は北岸斜面から発見される小馬越にある寺院辺に之を発見し得たろうに思ふが未だ之を聞かず こゝには熱心な研究家が居られるのであるが未だ発見されてゐない 然しかし北海岸に通ずる道路の東斜面に当る大躰村では遺物が発見され国民学校附の斜面よりは大型の石獣斧一個採集とされてゐる 当村当地の国民学校に奉職中発見されたもので目下草壁に居住して居られる（草壁の高女校附近横畔の小間物店主）小豆島で見た石器中では秀逸の品である 溪流の北斜面は遺跡地と考へられるが偶然の出土で遺跡として明確な場所の認識が出来なかつた 然しかし大躰村の大田家所蔵に弥生式土器がある 之は同家の農園であつた土地から開墾の際発見されたもので踏査の結果遺跡として好資料地たる事を知つた 丁度大躰より流下する溪流が瀬崎の河口平地に出る要目の屈曲点の南岸で溪流の北に向て突出してゐる處に当り急崖下の少し□の斜面である段階式に開けて果樹園造られてゐる所で今も尚弥生式土器細片を発見することが出来る此地方では先史住民遺跡研究上好適の資料である 次に本島では池田町附近が遺跡に富んでゐる 町は背梁山岳の南斜面で南側は東南に突出せる三都半島と西南に突出する小半島とを以て池田の湾を控え其間好適の平地を形成 一条の道路東西を走り安田村

に通じ又北に分支し大澤村に通じてゐる。此地では西南半島には応神天皇御祭壇の伝説があり又村岸に当る超勝寺丘陵平井代官屋敷址と共に金の出土があるを聞いてみたので先史遺跡でなからうかと考へてみた。然し此方面的出土品は美具の幸を得ず村の史家たる某氏に御付したが矢張り伝説のみで遺物は確実には御承知ないやうであったが然しかば此伝説は此地方に於ける遺跡の存在を物語るものであつた事は認識する事が出来中には遺跡に富んでゐることを見た。

超勝寺の住職より聞く所によると同寺の奥院たる清瀧山丁度池田町の後壁をなす急峻な山岳の南側山頂近くに在る此寺の後方より石礫が発見され先年調査の為来訪の某先生は之を探集されたが余は踏査して見たが発見し得なかつた。

然しかし町の東南部安田街道脇の北側丘陵の北斜面に当る地域には一条の溪流が流出西に流れて池田湾に注入してゐる。此溪流畔は比較的平地も發達し豊富な遺跡をなしてゐる。殊に其発見地は二溪流に別れ此二流の合する處は古松の原生林を有し此地域は遺物に富んでゐる。弥生式土器片石器等多く発見した。この辺では溪流も水清く水量も豊富であり居住地として好適に適した。合流点より一束の水流となるすぐ南側の斜面は既に果樹園に利用されてゐるが此地よりも多くの遺物を見又其下につゝく畑地よりも豊富に弥生式土器片を採集した。又此流の北側では東に横る小丘陵の西斜面の平地帯に果樹園として立派に經營されている(某家)所中央に東西につくる園内道南畔井戸附近よりは井戸開鑿の際遺物弥生式土器を発見した(遺物は当村中学生の労作業ありし時であつたから同中学に保管される筈)尚此附近表面には弥生式土器片の散在があり土器は俗にびくの楕と称してゐる。此辺にびく居住し土器を焼いたのだと伝説である。

此町附近では東南部に八幡社があり遺跡らしくも思はれるが未だ発見してなかつた。然しかし超勝寺所在の丘陵地には先年古墳の遺跡を見られ井上丈人郎等の努力に依り吉野時代の動王家[■]として[□]祭さられたと聞いてゐる。果して如何なる遺物であつたか存じないが西に向て延びてゐる丘上の如きは遺物も發見し得るかとも思はれる。此上の方では[■](註A)内の氏神社がある。此社の附近(路の西側)居住の某氏の案内に依り遺跡を確め得た。部落の東北の谷間に氏神社近く溪流に沿ひて参ると地形歩毎に高く丘陵を越さんとする谷間の発源地に達する。極く狭い発源地であるが水は清く草茂り潤滑のきらいはあるが北側の斜面は細き一条の道を以て峰をなし花崗砂質地で高燥であり居住には不適でない。此斜面谷畔などに亘り弥生式土器片並石器等が豊富に発見された。此土器は俗に——^{一束}の茶碗と称してゐる。先史遺跡として好資料である。此斜面を北に下ると急勾配を以て有名な一本松(純松?)の所に出る。此道で一個の祝部式片を採集した。

之より南へ三浦半島であり遺跡も存在する事と思ふが余りきかなかつた。然しかし半島の南端上では立派な石斧の出土があり先年柴田常惠翁の案内された安田村の高橋翁が保管して居られるときいた。斯く池田町附近は先史遺跡に富んでいるに係はらず早くから知られている後出土地の真相を知り得なかつたのであるが一日応神天皇御祭壇の遺跡を確めんと町の西南に突出地を踏査した。封土地形は背に依て南北両側に發見何れが夫に當るものかは不明であり[□][□]いわくら式のものでないことを覺つたのであつた。爆進丘の北部の斜面を池田湾岸に下つた時偶然にも海岸及びにつゝく砂質平地畑中に於て土器小片を発見した。然も小地域とは云へ港浜より畑地にかけて[□]豊富に散在せるを発見した。然も此土器片は普通の弥生式と異り全く植生本島等にみる又岡山県方面に見る薄手砂質口文様を有する吉葉式類似の品であるので驚きこれこそ伝説の袋であることを自信した。小豆島に於ける此様土器出土地を一つ増したことを悦んだ土地は——と称して南北両側に山尾港浜に突出其間に生ぜる狭小の砂浜と小規模の平地

とを抱ける處で上吉住民居住には適切地と考へた

次に草壁方面を観る有名な寒霞渓を背景として四望峰先牛尾ヶ城の高頂と有し内海の良港を控えて西南は三都諸半島東は坂手に至る山脈に囲まれ寒霞渓並に清流の溪流流下し海岸と流域狭小の平地を形成し注入口に於て草壁安田の人家發達し斜面地には西に西村東に苗羽峠を越て坂手港と成つて居り東部山岳間の地形を利用して道路は峠をこして東洋に通じてゐる。遺跡渓谷群に多いのは当然であるが又斜面地にも多少之を見西村では近時オリーブ園として利用されるに至つた斜面地が相当広いので開墾が行はるゝと共に遺物が発見され木下空太翁の退隠後の□跡の西北に当る山尾背に在るちばゝさんと称し古塔の數基ある所の西側斜面地で小形石碑が一個発見された。附近居住の発見者所蔵してゐる。踏査したが余り発見はしなかつた。然しかし此辺より奥に屬する谷間より把口は発見されると申すから先史遺跡は溪流の上流迄あるものと思はれる。又北斜面下街路の北畔水田にて瀧置用井戸を掘つた際地下より土器片を発見文様もあつたと聞いた。土器種類等確実に知り得ないのは遺物であるが弥生式かと考へられる。草壁に於ては寒霞渓に於て各所遺物を多く、四望峰に登る溪流の左岸で民家を離れた辺から遺物を発見したと小豆島中学校で聞き又四望峰より墓道を下る特に山麓民家に達せんとする専ら小浦池畔道路の東側切取崖より切取工事中弥生式土器を発見されたが工事監督の神保氏（後香川県僚職）が保管して居られるのを耳見した。

寒霞渓跡として最近注意を引いているのは渓谷にある洞窟内遺跡である。洞窟中はら貝塚では先年先史遺物が発見され東京都より調査の柴田常恵翁一行によりて発掘の結果遺物の土器片が實的に異つて居り下部には繩文系をも発見したりとて世の注意を引き前によりて高松で開催の郷土研究会にて發表され専研究の上に發表されることになった。果して事實とせば小豆島に於ける先史文化上一歩を△えたることとなる。

尚原ヶ城には木下翁の一代の事業として古社再興の計画で中央より技術家を聘し柴田人間等史家の調査を乞はれし結果先史遺物の発見も見た由承知す。從来安田村の高橋氏等も採集し居られし為其案内によりしものならん。

安田村にては郷土史家堂井高橋諸氏の在住地にて遺跡は早くより知られ先年堂井氏（己に故人となられしも今息は医院開業）の案内で出土地を視察した。安田村より渓に越す道の東岸で渓流畔現安田村隔離病院舍後に當る斜面地で遺物は堂井氏開墾の際出土したもので弥生式土器片数個採集されてみた。一部は荷物を受け現今は小豆島採集品と共に故木下翁別荘で保管されてゐる。大型半偏土器等相當参考になるべき出土があつた。

又安田村の北渓流の稍上流の西畔で草壁村との境邊に南に向て突出せる小丘陵中水道本源地になれる處よりも遺物土器片が発見された。安田村居住の印刻家等の採集譜である。未だ踏査採集はしてゐないけれども事實には相違ない。尚此地方渓谷群には各所先史遺跡が少くない。之は先年此等の遺跡にて偶然にも繩文陶器の出土あつた事実を僅め得るに至り轟上及發表して以来遺跡の注意を引き後其地の溜池拡大工事の結果多數の遺物が発見され小豆島中学校には當時斯道の研究家齊川幹夫氏が居られたので採集も學術的に出来好都合であった。此地は清流より発源する相當な渓流で殊に開墾出土地は瀬も済く其地形上先史人居住に好適地であり繩文陶器と共に弥生式土器も発見され又渓流を隔て其西南に當る斜面地俗に栗地と称し△所在地であつたと高橋翁の報せられた處である。溜池拡大工事の為斜面切下の際多数の遺物が発見された。弥生式土器の他石斧石鎌も少くなかつた。

又調査出土地の道を隔て東部にある溜池（五郎池？）畔よりも從來弥生式土器の発見があることも高橋

翁の証明する所であり早くから出土地として知られてゐる 安田村以南では海岸にある孤立小丘で応神天皇御遺跡と伝かる丘上には何か遺跡の存する由高幡翁から聞いてゐるが一度視察したのみで充分な事実を確め得なかつた 又其附位し西に向て長く発達せる龜山(?)よりは古墳古鏡の発見があつたが先史遺跡は充分に知り得なかつたしこれより坂手港の方面にかけても未調査である

小豆島東岸の瀬、岩谷方面も余り遺跡を聞かず先年木村幹夫氏の案内で吉備考古学会の見学旅行を行れた離島タケ谷の小半島地で古墳を発見附近で石劍とかの発見があつたと紙誌上で報せられたが石器は如何なるものであつたか遺憾乍ら詳見せずする此瀬沿地は急峻で住民にとても居住地として不適当と思はれ自然遺跡のないのが当然と思はれるが北部の福田村辺になると地形も稍開け溪流の灌漑もあるので遺跡もあつてよき處に打たれたが未だ聞かなかつた

之より小豆島の北海岸は一帯に急崖で風光はよいが遺跡の方は正反対である 然しかし此の急峻地と山頂及斜面で溪流出水地畔には遺跡が見られる 星ヶ城の遺物収集の如きも其一つであり又星ヶ城から少し北に下った處で福田村に下る瀬の上に当る溪流畔即ち当島での有名な福田水晶山の西南に当る处現今數軒の部落をなしてゐる處よりは遺物が発見されてゐる其一個■(註B) (高二寸位) は先年借用木下家別荘に保存願つて置いた 又北海岸の琴塚のある處附近に伝説を聞いた昔は山頂より北に向て下れる山尾の高所に居住民のありしが出木の為流下し焼物類が下方で発見されたと如何なる焼物であつたか不明であるが或は弦生式でなかつたかと考へられ又北海岸の一瀬の畔よりは弦生式遺物出土があつたと聞き満足登り其上方の開墾地を開べたが充分な遺物を探集し得なかつた

又北海岸で島の南側に下る岬より北海に下る旧道で 一氏が石孫(長三寸位) 一個を発見された 著者は押見もし又同氏が保管してゐる

以上の事実によると島の北岸では低地には少く反て高地に於て多少の遺物のあることが考へられた

後に八幡神社務所に備在調査せらる 香川県小豆郡瀬崎村 八幡神社所蔵

香川県史跡調査委員

高松高等商業学校教授

寺田貞次氏

調査書

昭和十年三月廿九日より十一月一日に至る調査期間

註

A 集蓄の意。

B 磐の縁。

香川県埋蔵文化財センター研究紀要IX

平成25年3月28日発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 板出市府中町南谷5001-4
電話 (0877)48-2191
印 刷 株式会社 成光社